
不機嫌な彼女とお調子者の彼の話

若林夏樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不機嫌な彼女とお調子者の彼の話

【Nコード】

N0939G

【作者名】

若林夏樹

【あらすじ】

いつもテンションの低い高校生ひなた。最近、生徒会副会長で人気者、それからかなりお調子者の川口から猛アタックを受けるようになった。ローテンションで暗い少女と、ハイテンションで明るすぎる少年のラブコメです。100回目の告白のときに……？

第1回 お調子者の告白（前書き）

思いつきりラブコメです。

ローな少女とハイな少年のギャップを楽しんでください。

第1回 お調子者の告白

性格は現実的で根暗。見た目は無愛想。テンションは常に低い。
そんな女の子、浅月ひなた（↑名前負けしているとよく言われる）
の最近の悩みは――・・・

「浅月ひなたさん！！俺とつきあってください！！」

そんなこっぴどくかしいセリフと共に差し出されたのは、紙で作られたひまわりだった。

「断る」

ひなたはそれを受け取ることなく一蹴した。

「えええええっ！いつもいつも・・・なんでー！？」

「なんでって・・・あんたそれ本気で言ってるの？」

「冗談だと思ってるの！？まさか！俺はいつもこんなに愛情表現してるのに！」

朝からこんなやり取りをするのは、すでに名物になっていた。ひなたにとっては迷惑以外の何物でもない。

いつからか覚えていない。どうやら南勢なんせい高校の生徒会副会長、川口諒りょうに好かれていたらしいのだ。

この意味不明な告白から始まり、ひなたがあっさりふったところまではまだマシだったのだが、その翌朝、川口はこりることなくまた告白してきた。そうしてそれが今日まで何度も続いているのだ。

「まあいきなり言われても困っちゃうよね。だから俺考えてきたんだ！」

無視して歩き出そうとするひなたを川口が追いかけてくる。ひどいようだが、これがいつもの光景である。

「例えば、放課後一緒に帰ってみるとか！お互いにもっと話し合うことによって愛が深まるような気がするんだ！」

そんなこととしてどうするんだ。

「他にもー・・・一緒に昼ごはん食べるとか！会話できるじゃん」
どっちかっていうと、食べるほうに専念したい。

「どう？どう！？」

きらきらとした瞳に屈託のない笑みでこっちを見てくる川口に、
ひなたは一言だけ呟いた。

「ごめん」

その瞬間、周囲からどつと笑いが起きた。

「またまた玉砕！！ぐっちゃん（川口のあだ名）の失恋回数95回目！！」

「違うよ。96回でしょ」

「俺はこないだで99回だって聞いたけど」

言いたい放題の周りの野次馬に向かって、川口は涙目になって叫んだ。

「まだ94回だよ！」

墓穴だった。

「毎日すごいよね。今日も川口君に告白されたんだって？」

面白がっているようにしか思えない発言をするのは、小学校からの友人、宮本彩香だ。ひなたが教室に入るなり、開口一番にそう言われた。

「あのねえ・・・あんなの本気なわけないじゃん」

「いや。あれは絶対本気だと思うよ。ひなたもつきあっちゃえばいいのに」

「ありえないし・・・」

そうだ。ありえない。

南勢高校は他とは少しだけ違った制度があり、ある特別な才能や地位の人物に『称号』というものが与えられていた。そういう人物はたいてい生徒会としてなんらかの役割を担うことになっている。

川口はその中でも、生徒会副会長をやっているのだ。

「贅沢だなあ。あんなかつこかわいい生徒会副会長になんの不満があるのよ」

彩香はぶーぶーとぶーたれる。

「不満とかじゃなくて、生徒会ってなんか違うような気がして・・・なんかそついうのが苦手かな」

「川口君はそんなじゃないでしょ」

そうかもしれないが、そもそも生徒会副会長をやるくらいの才能とはなんなのだろうか。とても謎だった。

それに、最近の生徒会はめちゃくちゃ謎だと言われている。

と、そのときだ。教室の扉が勢いよく開いて、まるで突風のように1人の男子生徒が入ってきた。

驚く暇もなく、その人物はひなたの目の前で立ち止まり、小さな白い猫を抱き上げて見せてくれた。

「浅月さん！校舎に住みつくノラがこないだ産んだ子猫！超かわいくない？」

にこにこ屈託なく笑う、このお調子者は一体何者なんだろうか。

第1回 お調子者の告白（後書き）

不定期更新でいきます。

これからもよろしくお願いします。

第2回 超本気の恋（前書き）

実際にありえないくらいの展開にしたかったので、
多少のことは小説だからと思っただけだと嬉しいです。

第2回 超本気の恋

神出鬼没という言葉当てはめるとしたら、きっとこの男のことを指すのだろう。

「浅月さん、めーっけ!」

浅月ひなたを見ると、窓の外に川口諒が手を振って立っていた。確か3階のはずだが。

「超偶然!なんか木に登ってたら浅月さんが見えてさー・・・もしかして運命感じちゃ」

「いや。感じないから」

否定すると、目に見えてしょんぼりとしてしまった。まるで子犬のような反応だ。

「えええええ・・・ラブアンドピースで行こうよー」

まったく意味不明である。

何か特別な才能や地位のある生徒にしか与えられない『称号』を持つている川口は、謎に包まれた生徒会の副会長をしている。

別に何かきっかけがあったわけではない。なぜかひなたは川口に好かれてしまったらしい。

木に登っていた理由は不明だが、川口は窓からよいしょと廊下に入ってこようとした。

「あっ!やばい!足・・・足が・・・つ、つった・・・!」

「はあ?」

手をばたつかせてもかく川口を見ていたら、ひなたはバカらしくなってきた。そのままつかつかと歩き去っていった。

「待って!待つ・・・わあああ・・・」

遠くでそんな声が聞こえたような気もしたが、無視して歩こうと・
・・・・したのだが、無理だった。何度も言うが、ここは3階
だ。

ひなたは慌ててその窓まで戻ってみたが、そこには誰もいなくな
ってしまっていた。

「嘘・・・まさか・・・！」

最悪の考えが浮かんできてしまい、焦って下を見下ろす。すぐに
目的の人物を見つけることができた。

川口諒は、制服の後ろ襟首を枝に引つ掛けた状態でぶらんとぶら
下がっていた。

「あはは・・・助けて」

まったく救いようのない男である。

「助かったー！ありがとう、浅月さん！おかげで命が救われたよ！」
ちよつとオーバーなような気もしたが、面倒なのでひなたは頷い
ておく。

結局あの後、ひなたが下からはしごを用意して川口を下ろすこと
に成功した。

「なんで木に登ったの？」

「そりゃあそこに木があったから！」

「はあ・・・」

その高いテンションについていけないひなたは曖昧な返事しかで
きなかった。

それにしても・・・とひなたは川口を観察してみる。改めて見て
みると、今までいかにひなたが川口の顔を見ていなかったことがわ
かる。こいつこんな顔だったかと疑問に思ってしまった。

「え？なにになに？そんな見つめられると照れちゃうよ！もしかして俺に惚れた！？」

とかなんとか言いながら、川口は顔を覆う。

こんなふうになくなくなければきつと女子にモテモテだったんだろうなと思う。なによりひなたみたいな暗い女子を好きだと言わなければ、もつとまともだと思われることは間違いない。

「って、て、ていうか・・・これは告白のチャンス！？」

本人は向こうを向いて小声で言っているらしいが、ひなたの位置ですでに丸聞こえだった。

「浅月さん！俺——」

「ごめん」

川口が何か言う前に、ひなたはあつさりと言い放つ。

その瞬間、いつからいたのか校舎の2、3階から何人かの生徒が顔を出し、イエーイと歓声をあげた。

「ぐっちゃん（川口のあだ名）95回目のしっつれーん！」

「うるさーい！まだ何も言っていない！」

顔を真っ赤にさせて川口は叫ぶ。

「ごめんって言われた時点でカウントされてんのー」

観衆はそこまで言くと、すぐに顔を引っ込めてしまった。

「くっそー・・・あいつらー」

「あのさ、1つだけ訊いてもいい？」

ひなたは素朴な疑問を口にする。途端に、川口の態度が変わり、なぜだか嬉しそうになる。

「いいよ！浅月さんから俺に話があるなんて嬉しいな」

「その・・・私のこと好きとか・・・本気なの？」

普通だったらありえない。なのに、どうしてなのだろうか。

しかし、それに対して川口はいつものように軽い調子で言うのではなく、すごく真剣な様子で頷いた。

「超本気」

それだけ言うと、にこっと笑って川口は走り去ってしまった。

第3回 ツンデレっ娘

「よっ！ツンデレ！」

いきなりそんなふうに呼んできたのは、友達の宮本彩香だった。ひなたは一瞬何を言われているのかわからなくて何も言い返せなかった。

「聞いたぞ〜。95回目の告白されたんだって？」

「は、はあ」

あくまでも平静を装おうとするひなたに対して、彩香はにやつと笑う。なんだか嫌な予感がしてきた。彼女とは小学生のときからのつきあいだが、この顔をするときはろくなことを考えていない。

「ひなたはツンデレだもんね。そういうところがかわいいんだけど」「意味わかんないよ」

「ほんととは告られるたびにめっちゃめっちゃ緊張してるくせに。いつともなんてことない顔してるよね〜」

だってあんなに堂々とされてこっちまで恥ずかしくなる。あんなふうにされたら、誰だって照れるに決まっている。

「川口君ってルックスもいいじゃん。なんでつきあわないのさ」「……………」

つきあうなんて考えたこともない。もごもごと口ごもっていると、彩香が小声で何かを言おうとしてくる。

「どうしたの？」

「ちょっとウワサで聞いたんだけど、川口君ってウチの生徒会長となんかあるらしいよ」

急にトーンの低くなった声に、思わずひなたは唾を飲みこんだ。

生徒会長、たまに全校集会や体育祭のときなどで生徒の代表として話すところを見たことがあるが、確か女だったような気がする。

「もしかしたら昔つきあってたのかもよ」

「べつ別に・・・私には関係ないし」

とか言いながらも、少しだけ気になっている自分にひなたは気づいていた。

「あつ！浅月さん！」

人一倍陽気なこの声はひなたの知る限り１人しかいない。振り返ると、川口諒が屈託のない笑顔で向かい側の校舎の窓から声をかけてきている。なんだってそんな所からでも声をかけてくるのだろうか。

「３７秒でそっちに行く！」

そして、腕時計で確認して３９秒後に彼は現れた。

「――２秒オーバー」

「うつそ・・・！あのとキ階段でコケなきゃ絶対間に合ったのに・・・」

ぜえぜえと息をつく川口の姿はどこから見てもおじいさんだった。

「今生徒会室にいたんだ。窓の見たら浅月さんが見えて思わず声かけちゃった！」

生徒会・・・その言葉にひなたはどきつとした。

「・・・生徒会の仕事してたんでしょ？抜け出していいの？」

「浅月さん心配してくれてるの！？ありがとー！」

いや、そういうことを言っているわけじゃないんだけど・・・と

思っていると、突然制服の上から腕を握られた。

「へっ？」

「来て！生徒会室においでよ！」

なぜか強引に生徒会室に連れて行かれることになる。

扉を開けると、そこにはしんと静まり返った静寂が広がっていた。しかし、明るい空間で、ひなたが持っていた印象とはだいぶ異なっていた。

「今は誰もいないや。遠慮することなくどっしり構えててね」

そう言っ、川口は慣れた手つきでお茶を入れる（そもそもなんで生徒会室に台所があるんだろうか）。

しかし、生徒会室に関係のない自分がいるのはなんだか落ち着かないことだった。

「ぜーんぜんオツケー！ほんとにくつろいじゃっていいよ！」

でも座るわけにもいかず、ひなたは台所で何かを探している川口のもとへ行く。

「手伝う」

そう言っ、ポットに入っ、たお湯をカップの中に入れようとした。

「あ・・待って！」

川口の静止は少し遅かった。気がついたらポットから出た熱湯がもろに手にかかってしまったのだ。

「あっつ・・・！」

「早く冷やさないと！」

ひなたの左手を引っ張り、慌てて水道水をかける。びりびりと痛みが、冷たい水で少しだけ楽になってきたような気がした。

「……もう大丈夫」

「このポットもうかなり古いもので……変なところからお湯が出てくるんだ……ごめん、俺が言わなかったから」

川口は本当に申し訳なさそうな表情でひなたの左手を手にとって見つめる。最初こそ意識していなかったが、しだいにその体勢が気になってしまった。

「——別に。勝手に手を出した私のせいだし」

ふなたはふいっとそっぽを向くことしかできなかった。

——びっくりした……

第3回 ツンデレっ娘（後書き）

やけにハイスピードでした。
以後気をつけます…

第4回 生徒会

ガラッ

何の前触れもなく、生徒会室の扉は開かれた。驚いて振り返ると、小柄な女の子が1人ひよこつと現れた。ひなたはすぐに彼女と目が合った。

「あっ……」

髪の毛を肩の少し上くらいまで伸ばしたおとなしそうな女の子は、ひなたを見るなり驚いた声を出した。

「雪乃ちゃん！ちよーどよかった！紹介するよ」

川口が嬉しそうに飛び跳ねる。

「生徒会書記の小塚雪乃ちゃん。それから……彼女は浅月ひなたさん！」

お互いに紹介されて、慌てて頭を下げる。こういうのは苦手だ。

「もしかして……ぐっちゃんの好きな人って……」

期待に満ちた表情で雪乃は川口を見る。

「ええっ！なんでわ坎のー？」

本気でわからないのか、心底驚いた表情をする川口。

「やっぱりー！わああ……はじめましてー」

なんだかよくわからないまま、ひなたは雪乃に握手を求められる。

「はわっ！もしかして私お邪魔でした？せっかく2人きりだったのに」

「ちっ……！」

なぜか違うと言いそうになったところで、また扉の開く音がした。3人同時に振り返ると、背の高い男がのっそりと入ってくるのが見えた。

「安藤！」

このスポーツマンのような人はひなたも知っている。よく全校集会で表彰されている陸上部の人だ。たぶんこの関係で称号を与えられているのだろう。

「ぐっちゃんの好きな人です！ようやく会えました！」

雪乃は嬉しそうに安藤に駆け寄る。それに対して、ほんとに陸上部かと疑うほどゆっくりな動作で安藤という男はひなたを見て、

「うおっ！はじめまして！」

やっと思者らしい声を出した。

「みんなやめてよー！照れるじゃんかー」

その場の空気に乗ってるのか読めないのか、川口は的を外れたことを言う。

「ぐっちゃんの彼女初めて見た！え、いいの？こんな男で」

興味津々に安藤は訊ねてくる。

「それどういう意味さ、安藤」と川口。

「あ、でもアレだ。かたつぽがちゃらんぼらんだと、もうかたつぽはちゃんとしてるって何かの漫画で読んだことある。そういうもんか」

「い・・・いえ。あの、つきあってないですから・・・」

生徒会のそのハイテンションについていけなくてぼそぼそと言うと、雪乃と安藤にひどく驚かれた。

ひなたはどうすればいいのかわからなくなり、表情には出さなかったが内心ではかなりうるたえてしまった。

「じゃあ・・・そろそろ帰ります。お邪魔しました」

早足で生徒会室から逃げるように出て行く。そのとき、扉の出入

り口付近で誰かとぶつかりそうになった。

—— 髪の毛の長い、とても美人な女の人だった。

だけど、そのときは何も気にせず、ひなたは頭だけ下げて走り去っていった。

「雨が降りそう……」

窓の外を見ながら、川口は1人呟く。ひなたが出て行ってからまだ数分しかたっていない。

「傘、持ってなかったですよ、ひなたちゃん」と雪乃。

「男ならここは送っていくべきだろう」と安藤。

2人はニヤニヤと笑って面白がっている。

一緒に帰る口実ができたと一瞬川口は頭の中で喜んだが、なんとなく行つてはいけないような気がした。

それを感じたのか、1番最後に入ってきた女子、林有奈^{ありな}——生徒会長が読書をしながら呟いた。

「行ってきたら？」

「じゃあ……行つてきます！」

元氣よく川口は飛び出していった。

少しぐらいの雨なら平気だったが、さすがに強くなってきた。ひなたは小走りで駅へと向かう。

「浅月さん！」

幻聴か？今さっき別れたばかりなのに、振り返るとまたその男はぴよんぴよんと飛び跳ねながら、自分はここにいるとアピールして

くる。面倒だったので無視していると、ますます川口は大きな声で名前を連呼してきた。

「1回呼べばわかるから」

「だってなんにも言ってくんないだもん。浅月さん、傘ないなら俺のに入ってきなよ」

取り出したのは小さな折りたたみ傘だった。こんな小さいものに2人も入れるのだろうか。

「……いいよ。濡れちゃうよ?」

「俺は下心があるから……」

そんなことを言いながら、もそもそと折りたたみ傘を開く準備をする。

「はい。あいあい傘!」

につこりと屈託なく笑う川口。なんで好かれているのかさっぱりわからない。

第4回 生徒会（後書き）

かたっぽがちゃらんぽんだと、もうかたっぽはしっかりする……
というセリフは有名漫画に出ています。
みなさんはわかりますか？

第5回 元カレ（前書き）

ひなたの元カレの登場です。

第5回 元カレ

なんでもない日の昼休みの時間、ひなたはぼーっと窓から運動場を眺めていた。

「ひーなーた！どうしたのー？」

横に友達の彩香が現れる。彼女は運動場へと目線を下ろし、何かを企むかのようにはーんと言った。

「わかった。川口君のこと見てたでしょー？」

「違うし。たまたまここにいたらあいづらが現れただけだよ」

眼下にはサッカーをやる男子の姿があった。その中に川口もいた。
「照れんな照れんな」

「いや、照れてないから」

本当に偶然だったのだが、何度言っても彩香は信じてくれないだろう。それ以上言う気にはなれず、ひなたはまた運動場へと目線をそらす。

と、そのとき、たまたまサッカーをやっていた川口と目が合った。くどいようだが、偶然である。

「浅月さーん！」

体全体でぶんぶんと手を振ってくるハイテンションな川口。まさか目が合うとは思わなかったので、とっさにひなたは隠れてしまった。

しまった・・・これじゃほんとに隠れてるみたいだ。

事実そうなのだが、なんとなくそれを認めたくなかった。しかし、今さら出て行く気にはなれない。

「えええええ・・・」

下からは情けない声と共に、名前が連呼される。隣では彩香が笑いをこらえているのが見えた。

「うるさーい！名前を連呼するなー！！」

思わず叫んだとき、再び顔を出してしまった自分に気づいた。それと同時に、川口がにこつと笑う。

してやられた気分になった。

「いい加減つきあっちゃえばいいのに」

サッカーをやる男子を見ながら、彩香が大人びた口調で言う。

「だからあんなん本気じゃないって」

「いやー・・・あれは本気じゃないとやらないでしょ」

あれというのは、今まで川口がやってきた数々の告白や恥ずかしい言動のことを指している。思い出ただけで、ひなたは恥ずかしくなってきた。

「正直、悪い気はしてないんでしょう？」

「や。ありえないから」

「意地っぱりー。窪田君くぼたよりずっといいのに・・・」

そこまで言つて、はつとして彩香は口を閉じた。その理由をひなたは知っていた。

窪田とは、ひなたが前につきあっていた彼氏の名前だった。彼に對して良い思い出はない。

「ごめん、私」

「いいよ。もう気にしてないから」

気にしない・・・そのときはそう思っていた。そのすぐ後に窪田に会うまでは――・・・

南勢高校には食堂があり、そこには自動販売機が設置されている。昼に行くとしても混雑しているが、時間帯によつては人が1人もいないときもある。

ひなたがその時間を狙つて飲み物を買いに来ると、ちょうど見知った人物がそこにいるのが見えた。

一瞬、もう少し遅く来れば良かったと後悔した。

「ひなた——？」

なんとなく悪寒が走った。まだ下の名前で呼び捨てにしてくるなんて……

「うん」

ぶつきらばうに返すと、なぜか苦笑いされた。バカにされたような気分になった。

窪田とつきあっていたのは高校1年生のときだ。同じクラスで席も近いことが多かったため、自然とよく喋っていた。根暗なひなたが気軽に話せる唯一の男子だった。

「最近元気か？」

「うん・まあね。そつちは？」

「俺も元気」

少しだけ遠慮するように窪田は言った。別れてからまともに話していなかったため、お互いに気まずい空気が広がっていた。

「なんかウワサで聞いた。生徒会の人間にめっちゃ告られてんだって？」

「別に……そんなんじゃないよ」

ひなたはこれ以上話したくなかった。だから、ジュースも買わずに教室に戻ろうとしたときだ。二度と聞きたくないような皮肉を込めた声が聞こえてきた。

「良かったじゃん。お前のことちゃんと好きだって言ってくれる奴がいて」

その言葉で思い出した。ひなたがフラれたときのことを。

『なんつーか冷たいっていうか・・・かわいげがないっていうか！・・・もっと頼ってほしかった。もうお前とつきあうの無理だ』

わかってる。冷たいし、かわいげがないのも。言われなくてもわかってるよ。

第6回 昼休みの会話

いつも昼休みの時間は外でサッカーをしたり適当な遊びをしていることが多い。だから、教室から運動場を見下ろすと、たいてい遊んでいる男子の姿を見かけた。

ひなたはぼーっとその様子を眺めていたが、その中に川口の姿がないことに気づいた。

無意識にひなたは彼を捜していたらしい。

「浅月さん！」

その声は思ってもみないところから聞こえてきた。だけど、少しだけほっとした。そのハイテンションな声をどこかで望んでいたのかもしれない。

しかも、その声はなんと頭上から聞こえてきた。

「やつほー！」

屋上にいる川口は身を乗り出して手を振っているが、一歩間違えれば落下しそうである。

「わぁっ！！」

「ちよっ・・・！すぐ行くから！」

なんでこんなにお決まりの展開になるのだろうか。慌ててひなたは屋上へと続く階段を上った。

「いやゝ危なかったよー！落としたのが靴だけで助かったー」

この男はつくづく救えない男である。以前も校舎の3階から落ちそうになったことがあるのに、今度は屋上からその身を投げ出そうとしていた。一歩間違えれば、大事にもなりかねない。

ひなたは屋上へ行くまでに一気に老けた自分を感じていた。

「ありがとう、浅月さん。心配して来てくれたんだね」

「別に・・・誰だって落ちそうになってんなら助けに行くでしょ・・・」

「ぼそぼそと呟くと、嬉しかったのか川口はぱあっと表情を明るくさせた。」

「・・・やっぱり浅月さんは優しいね」

途端に、ひなたは表情をこわばらせてしまった。今まで元カレにも冷たいと言われてふられたのに、初めてだった。ひなたのことを優しいと言う人物は。

「私のどこが優しいのよ」

無意識にそう訊ねてしまった。川口を困らせるだけかもしれないとすぐに後悔したが、そんな素振りを見せることなく、彼はあっさりと言い放つ。

「ずっと見てたから、優しいの知ってる。だから好きになったんだ」

今まで言われたことのない言葉に、ひなたは自分の中で何かが変化するのを感じた。

「あ、見てたって言ってもストーカーしてたとかそういう意味じゃないよ!？」

慌ててそう言う川口がおかしかった。もちろん川口が言うようなことなんて考えていなかったため、なんだか笑えてきた。

自然と笑顔になった。っていうか、笑顔を通り越してすごく笑えてきてしまった。

こんなに笑ったのは、窪田と別れて以来だったかもしれない。

それから、昼休みの間中ずっと2人は雑談していた。いつもあまり長いこと話したことがないため、ひなたは今まで知らなかった川口のことを多く知ることができた。彼は、ただのお調子者ではない。以外に思慮深い一面もあるようだ。

「浅月さんは？どんな子供時代送ってきたの？」

「私は・・・昔からこんなカンジだった。現実的で冷たいし、無愛想。テンションも低いつてよく言われた。あ、後は名前負けしてるとか」

思いついたことを述べただけだが、ひなたは暗いことしか言っていない自分に気づいた。なんだってこんなに根暗なんだろうか。

だけど、川口はなぜか怒ったような顔つきになった。

「そんなことない！浅月さんはすごく優しいし、なによりかわいい――」

言葉の途中で不自然にぶちぎられた。そのまま川口はあさつての方向を見てしまう。

「だけど、なんとなくわかった。川口が何を言おうとしていたのか・・・」

「そんなふうに言ってくれるの、川口君だけだよ。前の彼氏には冷たいって言われてふられたし」

ひなたは自分の言葉が失言だったと気づく前に、目の前の川口が一気に呆けた顔になるのを見た。

「あ・・・あさ、づき、さん・・・彼氏がいたんだね・・・」

俺が96回も告白してもそりゃあふつちゃうよね・・・」

「い、いや。もう別れたし」

そう言っても川口は聞く耳を持たなかった。心ここにあらずといふふうになってしまい、どうしようかと本気で悩み始めたときだ。屋上の扉がばたんと開かれた。

ひなたにとつてどこかで見たことがあるような女子がそこに立っていた。

「諒、昼休みに生徒会室に集まれって言ったと思うけど」

静かだがよく通る声に、振り返った川口はしまったという顔をした。

「ごめん、有奈^{ありな}！今から行く！」

有奈というのが今の生徒会長の名前だと気づいたとき、川口はもう立ち上がっていた。

「浅月さん、じゃあ俺行くね」

「あ、うん」

そのとき扉近くに立っていた有奈がじっとこっちを見る瞳に、ひなたは釘付けになってしまった。

『川口くんって生徒会長となんかあるってウワサだよ』
以前彩香が言っていたことを思い出した。

第7回 生徒会室にて

ひなたは今場違いな場所にいる。

「だからさ、いつそ開会式なんてやめちゃえばいいんですよ」

「でも、一応形だけでもやつといたほうがよくないか？」

「そうですねー・・・体育祭の開会式なんて面倒じゃないですかー？」

これは生徒会会計の安藤と、書記の雪乃の会話だった。

なぜかひなたはその真ん中に座っていた。

「あの・・・なんで私がここに？」

思い返せば放課後、帰宅しようと思っていると突然雪乃が押しかけてきて、問答無用で生徒会室まで連行されてきたのだ。

「だってひなたちゃんがここにいれば、自然とぐっちゃんも来ますから」

「だよな。あいつはいつも浅月さーんとか言って行方不明だからな。そろそろ来るぞ」

安藤の言葉が終わると同時に、生徒会室の扉ががらりと元氣なく開かれた。

「予想通り」

扉の前にはまるで魂が抜けたようにげっそりとしている川口の姿があった。

「ぐっちゃん、遅刻ですよー」

「だ・・・だって、今日は全然会えなかった・・・って、えええええっ！？浅月さん？なんでここに！？」

ひなたと目が合うと、心底驚いたような表情になる。人をエイリアンか何かのように見ないでほしい。

「雪乃が連れてきたんだ。ぐっちゃん、いつも会議のときに遅れてくるからな」

「ほーら！ひなたちゃんの前なんだから、ちゃんとかつこいいとこ見せませんと！」

雪野の言葉にはつとして川口は髪の毛を整える。そして、きりつとした顔で一言。

「こんにちは。マドモアゼル」

かつこつけているようだが、何が言いたいのかさっぱりわからない。

生徒会では、夏休み後に行われる秋の体育祭に向けての話し合いが行われている。南勢高校では、春に球技大会というものが行われ、秋には体育祭が行われる。イベントごとにもそこそこに力を入れる学校だった。

現在、競技を1つ増やしたいと考えているらしいが、それを入れると終了予定時間が延びてしまうそうだ。それをどうするかについて話し合われている。っていうか、開会式をなくすという方向に進んでいるのは気のせいだろうか。

生徒会ではない人間が口出しするわけにはいけないので、暇つぶしに生徒会室を見学させてもらうことにした。

まず最初に目に入ったのは、壁一面に飾られている賞状の数々だった。名前は、安藤悟あしたごと書かれている。

「それ、俺の輝かしい成績なんだ」

振り返ると、今まで話し合っていた安藤がこっちを向いている。

「昔っから走るのしかとりえがなくてさ、まさかこれで称号がもら

えるなんて思わなかったけど」

「称号・・・生徒会の人みんな持つてるんですよ？」

「まあね。ここはそういう寄せ集めみたいなもんだし」

ふと、他のみんなの称号が気になってしまった。なにより川口の称号について知リたかったが、そのとき彼が大きな声を出してこの話を終わらせてしまった。

まるでこれ以上つつこんでほしくないような雰囲気だった。

「そついや、今日有奈はー？」
ありな

川口の言葉に、ひなたは動揺してしまった。生徒会会長の名前、林有奈。ひなたが知る限り、唯一川口が名前で呼び捨てにする相手だ。

「日直です。もうすぐ来るんじゃないですか？」と雪乃。

「ふーん・・・」

その態度は安藤と雪乃を面白くさせるのに十分だったらしい。

「ぐっちゃん・・・浅月さんの目の前で浮気はいかんだろ」

「そうですよ。ここらで勇氣出して、ひなたって名前で呼んでみたらどうですか？」

「「えっ!」「」」

2人の言葉にひなたと川口は驚いた。名前で呼ぶなんてそんなこと考えたこともなかった。

しばらく悩んでいた。その間、生徒会室は沈黙だった。だが――
「呼べるかああ!」

普段はあんなに恥ずかしいことを簡単に言つてのけるのに、ひなたの名前は呼べないらしい。

なんとなく寂しさを感じたのは気のせいだろうか。

「今日はつきあってくれてありがとね」

いつもとは違い、なんだか大人びた様子で川口は言った。なんだか照れくさくなって、ひなたは平静を装う。

「お礼に家まで送ってく！乗ってつてよ」

「乗ってつて・・・？」

自転車にでも乗れと言っているのだろうか。だけど、ひなたの家は高校から電車を使って帰る距離だ。さすがに遠くないだろうか。

しかし、そんなひなたの考えはすぐに間違いだと気づく。自転車置き場に置いてあったのは、なんと原付だったのだ。

「・・・バイク？」

「うん！最近お金貯めて買ったんだ」

「いいの？バイクで来ちゃって・・・」

「生徒会の特権」

「はあ」

ひなたはなぜか余分にあったヘルメットを川口から受け取った。

第7回 生徒会室にて（後書き）

次回はバイクで帰るところからです。

第8回 バイクに乗って

バイクの後ろに乗るなんて初めての経験だった。

まずどうやって乗ればいいのかわからない。かわいらしく足をそろえて横向きに座るべきなんだろうかと考えたが、そんなことは性に合わないとすぐに打ち消した。ひなたはスカートをはいているのにもかかわらず、堂々とバイクにまたがる。

次に困ったのは手の置き場だ。

「しっかりつかまってね」

何に？ いや、つかまるところがないわけでもないのだが、正直振り落とされそうで怖かった。

前に座る川口が振り返る。ヘルメットをかぶっているためか、顔はよく見えなかった。

「振り落とされない？ 俺につかまっててもいいよ」

それはそれで困る。だけど、他に持つべき場所もなくひなたはおそろおそろ川口の体に手を回す。

「変なところ触らないでね」

「・・・変なところ？」

「俺の大事な部分」

「触るか！」

思わずつつこみを入れたところで、原付は発進する。ブーンと独特の音を立てて学校を飛び出していった。

走り出すと、スカートがめくれてしまうことに気づいた。元々ひなたはスカートの下にスパッツをはいているため見られて困ることはないのだが、みつともないことこの上ない。太ももではさむなり

して、なんとかめくれないように工夫する。

「浅月さん、門限とかってあるー!？」

エンジン音に邪魔されて、上手く聞こえない。だけど、言っていることは理解できたため、ひなたも大きな声で返事をする。

「一応!」

「今ちよつこと寄り道しても大丈夫!？」

「うん!」

どこへ行くつもりなのだろうか。一応自分の家の近所のわかりやすい場所を川口に教えてある。

夏の風が心地いい。汗ばんだ体もいい感じに涼しくなってきた。夏のがわかった。

そのうち、ひなたは風の中に潮の匂いを感じるようになった。もうすぐ海が近いのかもしれない。

「はいっ!とーちやく!」

バイクのエンジンを止めると、波の音が聞こえてきた。ひなたはヘルメットを取って、波打ち際まで走る。

「わああ・・・海だ・・・」

海なんて何年ぶりだろうか。なんだか嬉しくなってきた。

太陽が沈みかけていて、水面がキラキラと光っている。眩しくてひなたは目を細めた。

「いいでしょ、ここ!特に太陽が沈む今なんかは特に綺麗なんだ!」
隣に川口が立つ。彼は遠くを見てまるで何かを懐かしんでいるように見えた。ひなたは笑顔で頷く。

「よくここに来るの?」

「たまにね。浅月さんにふられたときとかよく慰めてもらってます」
そんな自嘲気味に言われると、ひなたは返す言葉がなくなってしまう。

川口のことは好きだ・・・と思う。嫌いじゃない。確かに彩香の言うとおり、ルックスだっていいし、性格だって悪くはない。むしろ性格にかなり問題があるのはひなたのほうで、それが原因でまたふられたりするのが怖かった。

「——ひなた・・・」

一瞬、ひなたはどきっとしてしまった。

「・・・が好き。あつたかいし！」

「あ、なんだ・・・」

自分の名前を呼ばれた気がして緊張してしまった。そうだ、さっきも名前では呼べないと川口が言っていたのを思い出した。それにしてもびっくりした・・・

一方、川口はちらりとこちらの反応を窺^{うかが}ってくる。きょとんとしてひなたが見返すと、全身の力が抜けたかのようにその場にうずくまった。

「・・・！？川口君？」

「もー・・・」

「どうしたの？」

「いいよ・・・わかんなくて」

まったく意味のわからないひなたはしばらく混乱していたが、やがて川口が起き上がったので気にすることをやめた。

「いいや。浅月さん笑ったし！」

「え・・・？」

「最近元気なかったから。何か・・・悩んでるように見えて」

たぶん元カレの窪田に会ったときのことだ。あんまり表情に出さないようにしていたつもりだが、川口にはわかっていたらしい。

敵わないな・・・やっぱり川口はすごいや・・・

いつのまにか太陽はだいぶ沈んでいた。夏だから6時を過ぎてもまだ明るいが、川口は門限のあるひなたを気遣ってそろそろ帰ろうと言い出した。

「もうすぐ夏休みだね！」

帰り道、不自然なほど大きな声で川口が叫ぶ。ひなたも負けじと「そうだね！」と大声で返す。エンジン音よりも大声だったかもしれない。

「勉強しなきゃね！」

「そうだね！」

「息抜きしたいね！」

「そうだね！」

まるで昼のバラエティー番組のような掛け合いを繰り返した後、バイクが信号で停止した。そのとき、意を決したかのように川口が振り返った。

「デートしよう！」

「いいよ！」

あっさりと返事すると、逆に川口からの反応がなくなってしまった。顔がよく見えないため、何を考えているのかわからなかった。

「・・・いいの？」

確認するかのように言われると、なんだかひなたはすごく恥ずかしくなってしまった。

「・・・うん」

「ほんとに、ほんとにいいの？」

「いいって言ってるじゃん！ああもう！前向いてよ！変なところ触るよ！」

「浅月さんなら触ってもいいよ」

「ヘンタイ！」

ヘルメットを叩いたが、ダメージがないのが悔しい。

信号が青に変わる。太陽が沈んだ海沿いの道をバイクはゆっくりと進んでいった。

第9回 合コン1

受験生に夏休みなんて関係ないなんて言葉があるが、本当にそうなのかもしれない。終業式が終わった次の日から、いきなり補講なんてものが始まり、これじゃあいつもとなんの変わりもなかった。南勢高校は進学校だ。冷房のきいた部屋でありがたい授業を受けることができる。

「あつっー！ほんとにこれ冷房きてんのー！」

教室のスイッチでは冷房の温度を変えることができない。そのため、どんなに暑くても設定温度を低くすることができないのだ。彩香はさっきからこんな感じだ。汗でマスカラが落ちるとばやいている。化粧をしていないひなたには無縁の悩みだった。

「・・・にしても、今日は念入りな化粧だね。どっか行くの？」

「——うん。ちょっと友達と会う約束してるの。ねえ、ひなたは今日ヒマ？」

「ヒマだけど・・・なんで？」

少し嫌な予感がしてきた。なんでだろう。彩香と遊ぶのは別に珍しいことじゃないのに。

「ひなたも今日一緒に遊ばない？小学校のときのまっちゃんとか来るんだけど」

「へえー・・・」

小学生のときの友達だった女の子の名前を言われて安心してしまったところもある。深く考えることなくひなたは頷いた。

「よしっ！じゃあ、夜の6時に駅前に集合ね！約束だからね！」

何度も何度も彩香は確認をしてくる。それが余計に怪しかったが。

騙された――

「合コン」

「違うつて！ただ一緒にごはん食べましょーっていう会だよ！」

慌てて言い繕^{つくろ}う彩香。だけど、男女4人ずつ集まれば合コンのよ
うに思えなくもないのだが。たぶんひなたは誰かの代わりに人数合
わせとして呼ばれたのだろう。

「私、帰ってもいい？」

「それは困るよ！1人減っちゃうじゃん！」

やっぱり合コンだつてわかつて誘ったな・・・

ひなたはため息をつく。どうせ自分がいたところで盛り上げるこ
ともない。適当にごはんだけ食べて、さっさと帰ろうかなと考えた。

その舞台は和食のお店だった。すでに相手が席を取っていてくれ
ているらしくて、まっちゃんは（本名は松井美穂）は店員に名前を
言つと、すぐに席に案内してくれた。

「お待たせしましたー！」

まっちゃんの声に反応した4人の男は、べつたりと作った笑顔で
出迎えた。

ひなたはそれに嫌悪感を抱いたが、他の3人の女子も愛想笑いを
浮かべて席に座る。最後まで渋っていたひなたも彩香に強引に座ら
される。

「じゃあ、まずはじめに自己紹介でもしますか！」

誰が言い始めたのかは知らないが、男子から何か言い出した。も
ちろんひなたは聞いていなかったが。

楽しそうな会話が繰り広げられる。いつのまにか席替えも行われていて、ひなたの隣には彩香ではなく、見知らぬ男が座っていた。ひなた自身会話する気がまったくないので、この男の人めもかわいそうだと思っていたが、そういうわけでもなさそうだ。

「もしかして浅月さんもこれが合コンだって知らなくて来たんじゃないですか？」

「えっ・・・なんでわかるんですか？」

思わず質問してしまう。

「俺もなんです。だから、なんてゆーか、雰囲気俺に似てるな！って思っただけ」

「お互い災難ですね」

男（名前聞いていなかった）は苦笑して目の前のウーロン茶を飲む。他の男は酒を飲むのに、彼だけはなぜかウーロン茶しか頼まなかった。

「お酒は飲まないんですか？」

「飲むとすぐに寝ちゃうんです。あいつらもそれわかって無理にすすめたりしないから助かるかな」

確か県内の大学生だと言っていたような気がする。お酒が飲めるんだから成年なんだろうが、怪しいものである。

ひなたは男を観察してみる。茶色に染められた髪をワックスで立たせていて、現代風の印象を与える、ような気もするが、どこかで見たことのあるような顔にも見えた。

「浅月さんって南勢高校なんだよね」

「え、あ、はい。そうですね・・・」

いきなり話しかけられたことで観察していたことがバレたのかと

ハラハラした。だけど、男は特に何かを気にすることなく喋りだす。
「俺もそこ出身なんです」
「へー・・・そうなんですか」

少しだけ興味がわいたそのときだった。視界の片隅に、たった今入ってきた2人組みの客が目映る。それを見てひなたは硬直してしまった。

——川口と林有奈だった。
別にやましいことはしていないのだが、なんとなく見つかったら困る。

2人はひなたたちの座る席から少し離れた所に座った。幸いなことに、ここは死角になって向こうからは見えないだろう。

しかし、見つからないように祈り始めたときだ。いきなり他の男子が大声を出して、

「よっしゃー！じゃあ飲みまーすー！！」

誰も頼んでないのに、いきなりジョッキを片手に立ち上がり、そのまま一気飲みしてしまう。何が楽しいのか彩香とひなた以外の面々は喜んでその男をあおる。

今の声が聞こえていなければいい・・・と思っておそろおそろ川口たちを見ると・・・

明らかにこつちを見ている2人と目が合った。

第10回 合コン2

なんとなくこの瞬間を見られなくなかった。よりによって合コンしているときに出くわすなんて――・・・

ひなたはつくづく自分の不運さを呪った。

でも、向こうも生徒会長と仲良くデート中みたいだし・・・
っていうか、なんでこんなことを考えなきゃいけないんだ。

「浅月さん？どうしたの？」

男に声をかけられ、はっとしてひなたは現実に戻る。

「いえ、なんでもないです」

手元にあったジュースを飲んでその場をごまかす。男は特に気にしたふうもなくにこやかに笑いかけてきた。

そうだ・・・気にしちゃだめだ。関係ないんだから。

と、そのとき、さっき一気飲みをした男がまた立ち上がった。今度は何をやりだすのかとうんざりしながら見ると、

「じゃあそろそろカラオケ行こっか」

ん？カラオケ？

そんな話は聞いていないと彩香を見ると、彼女も知らなかったらしく、困惑した表情でまっちゃんを見ている。

「この隣に安いカラオケがあるんだ。おごるから行かない？」

その軽そうな笑顔が怖かった。ひなたは最初に感じた嫌悪感を思い出し、腕時計を見た。時刻は8時半を過ぎていた。

そろそろ帰ろうとひなたが立ち上がったときだ。さっきまで自分に優しく話しかけてくれた男に腕をがしっとつかまれてしまったのだ。

「——っ！」

「どこ行くの？まさか帰っちゃうなんて言わないよね？」

カラオケに行きたいと純粹に思っただけで誘っているのだから。だけど、初めて合コンに来た頭の固いひなたから見たら、その笑顔はさらに不安にさせるのに十分だった。

「……ちよっとお手洗いに——」

そう言うことしかできなかった。ひなたは逃げるようにトイレへと走った。

なんでだろう……。怖い。こんなに怖い笑顔なんて見たことがなかった。

「ひなた！」

後を追うようにしてトイレに彩香が入ってきた。彼女の様子も少しおかしかった。

「ごめんね！ただの食事だけだっと思って……。合コンってなんとなく気づいてたけど……」

「いいよ。気にしてない」

彩香のことは怒っていない。ただ、男たちの笑顔に嫌悪感を抱いたのだ。

「それよりカラオケ行く……？」

ひなたの言葉に、彩香は微妙な顔をした。彼女の家は基本的には門限に寛大だ。だけど、そんな彼女が渋っている。

「なんだろう……。ちよつとあの人たちがやばい気がするんだよね」
同感だ。ただ本能的にやばい気がするだけだ。

「でも、ここで抜けたらまっちゃんたちに悪い気もするし……」
「そうだよね……」

ひなたは客として来ていた川口たちのことを思い出していた。な

んとなくこれ以上見られなくなかった。

と、そのとき、女子トイレに人が入ってきた。

「・・・・・・・・」

誰も何も言えなくなつた。トイレに入ってきたのが、なんと生徒会長の有奈だつたからだ。

彼女と川口の来店に気づいていなかったらしい彩香は驚いている。

「あれ・・・生徒会長」

と呟いた。一方、たいして興味のないように有奈はこちらをいちへつ一瞥した後、無表情で頷く。

「あなたたちも・・・南勢高校の生徒？」

なんとなく上から目線の言い方だった。「はい」とひなたたちも敬語になってしまう。

しばらく静寂が支配した。

「じゃあ・・・私たちはこれで・・・」

これ以上話すこともないので、トイレから出ようとしたときだ。
「1つだけ言っておくけど」

鏡の前に立つ有奈の声に2人は振り返った。

「お相手の男性の中に、こないだ暴行事件を起こして逮捕された人があるの。ほら、あなたの隣に座ってた人・・・」

有奈はまっすぐにひなたを見つめる。っていうことは、さっきまで話していた人かと思ひ当たる。やっぱり名前は出てこないが。

「私の父、刑事なの。だから顔を覚えただけど・・・・・・・・・・そこ
のところ十分注意をしてね」

そう言つと、手を洗つて彼女はトイレから出て行く。ちょうど出ようと思つていた2人はなんとなく彼女に道を譲つた。

逮捕・・・なぜか嫌な印象しか受けなかったが、そんな話を聞けばもう2人の決意は固まっていた。

「まっちゃんたちにも知らせられればいいんだけど・・・」

「メールしてみる？」

ひなたはそう提案してみたが、見るかどうかわからないし、バレたらバレたでやばそうだ。

とにかく2人は女子トイレから出た。なんとかするしかないのだ。

なんだか怖くなってきた。不安が体中を支配する。
どうしよう・・・どうすれば――

「――！」

そのとき、また誰かによってひなたは腕をつかまれた。さっきの男に腕をつかまれたことを思い出し、とっさに腕を振り払った。
そして、驚いた。そこにいたのは・・・

「川口、君――？」

第11回 合コン3

川口はまっすぐにひなたを見る。無表情だが、目で何かを訴えかけられているような気がした。

隣にいた彩香が不穏な空気を感じたのか、慌てて2人の間に割って入る。

「ちっ違うの！私が強引に誘っただけで、ひなたは合コンだって知らなかったの！」

違う。川口はそういうことを考えているわけではないようだ。彩香の言葉に頷くだけだった。ただ、目線だけはひなたからそらそうとしない。

なんとなくわかった。川口も有奈も、ひなたたちが考えていることを理解している。

ひなたの口から小さな声が漏れた。

「たす・・・けて・・・」

できればこんな迷惑をかけたくなかった。

「うん」

ようやくひなたから目をそらした川口は、彩香を見てまた頷く。深刻な顔をせず、いつものように明るい顔だった。

「とりあえず2人とも外に出ててね」

「でも友達が・・・！」

「大丈夫。他の人もすぐに連れてくるから」

不安になる。一体どういう手を使ってまっちゃんたちを連れてくる気なのだろうか。それよりも、彼らの恨みが関係のない川口たちに向けられてしまわないか心配になる。

ひなたがそう考えていたときだ。ぽんっと温かいものが頭に触れ

た。

見ると、川口が優しく微笑んでひなたの髪をなでている。

「心配しないで。すぐ終わるから」

そうして、10分くらいたっただろうか。レストランの外で待っている、1台の車が停まって男のお客さんが入った以外は静かなものだった。

何か中であつたらどうしようかと今さらになつて不安になると、1人の少年がレストランから出てきた。

「川口君！」

思わず叫ぶと、川口はけろりとした表情で手を振ってくる。

「お待たせ」

「大丈夫！？中で何かあつたの！？」

「何も？ごはん食べて喋ってただけだよ」

あっけらかんと川口は言い放つ。にこにこと笑っているが、その真意はつかめない。

ひなたが追究しようと口を開きかけると、またレストランから人が出てきた。今度は有奈だった。その表情はとても涼しげだ。

「中で何が・・・？」

今度は彩香が訊ねる。だけど、有奈はきよとした顔で彩香を見返してきた。

「何がって・・・何の話？」

さっぱりわからない。ひなたたち4人が困惑していると、川口がにっこりと笑う。

「まあ・・・たまたま運がよかったただけだね」

「え？」

「あの4人にはもう近づかないほうがいいよ」

一瞬見せた川口の寂しげな表情は、明らかにひなたを見ていた。なんだか後ろめたい気分させられた。

ひなたは1人帰る道の途中、今日のことをずっと考えていた。

レストランの中で何があったのかはわからない。運が良かったと言っくらいなのだから、きっと何かあったことは間違いない。

だけど、それよりも考えることは・・・

今日の川口のひなたを見る目が、忘れられなかった。

だけど、翌日。補講で学校に来ると、川口はいつもとなんら変わらずに登校中に待ち伏せしていて、

「浅月ひなたさん！俺とつきあってください！」

とかなんとか言いながら、うずまきキャンディを差し出してくる。いや、そんなもの渡されても困るんだが。

「・・・断る」

「ええっ！せっかくキャンディ作ってきたのに・・・」

どうやら手作りらしいが、なんだってキャンディなんだ。ひなたは返す言葉も見つからなくてそのまま歩き出す。「待つてよ」と川口が追いかけてくるのがわかった。

「ぐっちゃん、100回目の失恋！」

傍にいた坊主の男数人がひやかすようにからかう。ムキになって川口は、

「ちがーう！まだ98回だ！」

へえ、いつのまにかそんなになるんだなと当事者であるひなたは思う。だけど、次の言葉に少しだけ疑問を抱いた。

「だけどぐっちゃん、タイムリミット目前だな」

「そうだ・・・100回ふられたらもうあきらめるって言ってたもんな！」

川口がまた怒りそうになっていたので、坊主の男たちはすぐさま逃げ去ってしまう。

そうなんだ・・・私があと2回ふったら、川口君はあきらめるんだ・・・

何かが胸の中に引っかかった。なんだろう・・・よくわからないけど。

ひなたの考えをよそに、追いついてきた川口がににこと笑顔で言った。

「デート、どこですか？」

今しがた告白してきた男の言葉ではないような気もしたが、一般的なデートというものを考えてみる。

「・・・お祭り、とか」

「賛成！」

川口が笑顔で賛同した。

第11回 合コン3（後書き）

次回は2人のデート編です。

第12回 お祭り1

ひなたは朝から妙に緊張していた。

服装は変じやないだろうか。髪の毛ははねてないだろうか。鏡の前で何度確認しても不安になる。

今日は川口とデートの日だ。

約束の時間より少し早めに来たが、すぐに川口も現れた。バイクに乗ったまま集合場所のショッピングセンターの前に停まる。

「浅月さん！おはよ！」

ヘルメットを脱ぎ、にこにこ挨拶をしてくる川口。ひなたも挨拶を返そうとしたが、なぜか声が掠れて上手く出なかった。

ちなみに時刻は午後3時。おはようと言っよりむしろこんにちはの時間である。

集合したショッピングセンターはいつもより人が多いように思えた。今日はお祭りが行われるためか、それまでここで時間をつぶす人がいるのかもしれない。

「いやゝよかった！もしかしたら自分に都合のいい夢でも見てるんじゃないかって昨日まで本気で思ってたもん」

「・・・夢かもね」

「待つて！それは困る！俺どんだけこの日を楽しみにしていたことか！」

午前中に補講があったため、必然的に午後に待ち合わせになる。

午前中に会ったときも夢だったらどうしようかとぼやいていたのを思い出した。

だけど、それはひなただって同じだった。

もし当日になって突然行けなくなったと川口に言われたら、それ

なりにショックを受けるだろう。

「じゃあ・・・行こっか！」

ヘルメットを渡され、ひなたは頷いた。

ふと、こないだの合コンのときのことを思い出す。あのときのことを川口は何も言ってこない。

それが逆に気になってしまう。

祭りは南勢高校の近所の臨海公園で行われる。そこで花火も打ち上げられるらしい。

時間にはまだ早かったが、すでにたくさんの人が訪れていた。きつとみんな花火を待っているのだろう。中には席を取っている者もいた。

多くの出店も出ている。

「すごい・・・人が多いね」

率直な感想を言つと、なぜか川口は嬉しそうな顔をした。

「浅月さん、ここ来るの初めて？」

「うん。地元のお祭りにしか行ったことないかも」

「そっかぁ・・・俺は小さい頃から来てたんだけ。射的やるために」
「射的？」

きょとんとして聞き返すと、にこにここと笑って川口は頷く。目指す先には射的がある。

「上手いの？」

「いや・・・いつも有奈に負けてたし」

その言葉にどきつとしてしまった。この口ぶりからすると、いつもは生徒会長とお祭りに来ていたのだろう。

どういう関係なんだろうか。川口にとって有奈は特別であるようにひなたからは見える。

「俺やつてもいい？浅月さん、なんか欲しいもんある？」

そう言われて、はっとしてひなたは我に返る。なんだかおかしい。普段はこんなことを考えないのに。

改めて的となる景品を見る。ひなたはそこでパンダのぬいぐるみを見つけた。

「左から2番目の・・・パンダ」

「オッケー。まかしとけ！」

そう言くと、おじさんにお金を渡して玩具銃を受け取る。ひなたはその横顔を眺めてから、的を見つめた。パンダを見ていたが・・・

「あれっ？」

なぜか弾はパンダとは真逆の方向に当たった。

「パンダだよ？」

確認するように言うと、川口は「あははー」と笑ってもう1度構える。ぱーんと撃たれた弾は今度はパンダとは違う場所にあった巨大なゴリラのぬいぐるみに当たった。

「おおっ！当たりだよ！」

おじさんが大げさなくらい大声で言う。しかし、川口は喜ばなかった。

「おっかしーなあ・・・俺はちゃんとパンダ狙ったつもりなのに・・・」

なぜ右から3番目にあるゴリラに当たったのか不思議でしようがないという様子だ。君には射的の腕はないとひなたは言いかけたが、なんとなく面倒なことになりそうなので呑みこむ。

結局、パンダに当てることができなかった。

「ごめん……」

「別にいいよ。ゴリラだってかわいいし」

なぐさめるつもりで言ったわけではないのだが、川口は普段と比べてもかなりローテンションになってしまっている。その背中にはゴリラがいる。

いつのまにか人口密度がさらに高くなってきている。川口とはぐれないようにしなきゃと思って彼を見上げると、さっきまで落ちこんでいた川口は何かに気づいたらしい。ある一点を見つめて固まっていた。

「ぐっちゃん！」

その声に、川口の顔がほころぶ。

「久しぶりだなー、ケンタロー！」

「ああ。中学以来か？や、同窓会で会ったか。でも全然変わんねえなー」

どうやら中学のときの同級生らしい。言葉の内容から南勢高校の生徒ではないことがわかる。

「そっぴや、今年は林さん一緒じゃないのか？ゴリラとデート？」

ケンタローと呼ばれた男は不思議そうに訊ねてくる。川口は苦笑しながら答える。

「うん。特にそっぴや話出なかったし」

「珍しいな。お前らずっと一緒だったのに」

少しだけ動揺するのをひなたは感じた。

第12回 お祭り1（後書き）

なんだか季節が全然違いますね……；；

第13回 お祭り2

何を考えているのかわからない。それが率直な感想だった。

さつきから隣でにこやかに笑っている川口をじっと見ながら、ひなたは心の中でため息をついた。

なんなんだろう、この男は。ずっと前からあんなに美人な有奈と仲が良かったのだ。それなのに、なんで自分のような根暗を好きだと言っのかわからなかった。

「浅月さん？どうかした？」

ひなたの異変に気づいたのか、川口がきょとんとした表情でこっちを見てくる。

その瞳を見て、ひなたはこないだの合コンのときのことを思い出した。そういえば、あのときもこうやってじっとひなたの目を見てきた。

まるでひなたのすべてを見透かしているような。

「こないだ、あのレストランで……」

何を言えればいいのかわからずに、ひなたは語尾を濁す。川口はすぐに思い当たったらしく、「ああ」と頷いた。

「2人にはお礼を言わなきゃってずっと思ってた」

「別に何もしてないって。ただ、有奈が前に逮捕された男の顔を覚えてたから、ちょっとやばいかって」

はにかむように笑う川口は本当に何も気にしてないようだ。

「それに、あの日はたまたま有奈の父さんが来ることになってさ。あいつの親父、刑事でさ、まあその関係で鉢合わせて向こうから逃げてっただけ。そうなるように適当に話合わせたから、もうあいつらから連絡が来ることはないかもね」

よくわからないが、なんとかしてくれたことがわかった。

「でも浅月さんが合コンなんてなあ・・・最初見たときショックで頭真っ白になったよ」

まただ。言いようのない苛立ちを覚えた。

そんなこと本当は思ってたにくせに・・・本当に思っているのなら、そう簡単に口にしないはずだ。

「でも俺が口出しできることじゃないね・・・ごめんね」
へへっと笑う川口。ひなたは我慢できなくなった。

「なんで私なの・・・」

「浅月さん？」

「川口君には林さんっていう人がいるじゃん・・・今日だって私がお祭りに行きたいって誘わなければ・・・林さんと一緒に行けたのに・・・」

「ごめんと謝った。それが川口を困惑させるだけだとわかっていても、やめることができなかった。」

「・・・たまに誤解されるけど、俺と有奈はなんもないよ。ただの幼なじみっていうか、浅月さんが思ってるようなもんじゃない」

「・・・」

「俺が好きなのは浅月さんだ」

そのとき、川口の後ろで打ち上げ花火が上がった。思わずそちらを見てしまうが、彼はひなたから目をそらそうとはしなかった。
ずるい、こんなの。

自分自身が何を望んでいるのかわからなくなってきた。いや、わかっていえると思う。素直にそれが実行できないだけだ。

「・・・それ、冗談にしか聞こえない・・・」

その言葉に、川口が一瞬悲しい表情をしたのをひなたは見た。途端に後悔した。言うべきじゃなかった。なんてことを言ってしまったんだろう。

「——今の・・・本気で言ったら、結構傷つくな・・・」

帰ろうかと川口が言い出したのは、それからすぐのことだった。ひなたは頷くことしかできなかった。情けなくて、申し訳なくて泣きたかった。

帰り道は無言だった。バイクの後ろに乗せてもらっているが、ひなたは居心地の悪さを感じていた。

潮風が冷たく感じられる。後ろのほうからはまだ花火の音が聞こえている。お祭りは始まったばかりだ。

わかってる。自分が悪いってことくらい。素直に謝ることができたらよかった。

だけど、謝ることで余計に川口を傷つけることになったらどうすればいいのだろうか。それこそ後悔してしまう。

嫉妬という言葉がひなたの中でぐるぐると回っていた。

そう、たぶんひなたは林有奈に嫉妬していたのだ。名前で呼んでもらえる特別な存在。羨ましかった。

もっと早く気づくべきだったのだ。川口が存在が自分の中でこんなに大きくなっているということに・・・

「——っ!!」

ひなたは何も考えることなく、目の前の運転手の腹を絞めた。驚いた拍子にバイクが変な音を立てて停まる。

「びつ、びつくりした・・・！なにすんの！？」
げげほと咳き込みながら川口が抗議する。

「ごめん・・・」

どんな反応をされるかはわからない。だけど、言わずにはいられなかった。それが今のひなたの気持ちだった。

「もう、いいよ」

静かな川口の言葉。だけど、その一言でひなたは目の前にいるはずの人物の間に大きな隔たりを感じてしまった。

またバイクは走り出す。そのままひなたの家の前まで乗せてくれた。

「今日はありがとう」

そのときの川口の寂しげな表情が忘れられない。近くにいるのに、川口がとても遠くに感じられた。

第14回 幼なじみの言葉

川口と一緒にお祭りに行ってから変化したことが1つ。それは、以前のように川口から話しかけられなくなったことだ。

「なんかあったの・・・？」

最初にその異変に気づいた彩香が不思議そうに訊ねてくる。

「もしかしてこないだの合コンが関係してる？」

それをずっと気にしていたようだ。ひなたが関係ないと首を振ると、ほっとしたように息をついた。

きっかけはもちろん、お祭りのときだった。

ひなたの一言で、結果的に川口を傷つけてしまった。

「どうすればいいのかわからない・・・」

もう面と向かって謝っても許してもらえないことくらいわかっている。むしろこのまま話さないでいるほうが彼にとってはいいのかもしれない。きつとこんな女と話なんてしたくないだろうから。

「ひなたはどうしたいの？」

彩香の言葉に、ひなたはどう答えたらいいのかわからなかった。したいこととできることは違う。

「ケンカでもしたの？」

ひなたは首を振る。

「最低なこと言っちゃった」

そのとき、廊下を川口が歩いていくのが見えた。何人かの男子と笑いながら通り過ぎていく。元気そうで少しだけ安心した。

「このまま関わらないほうがいいのかもしんない」

それが1番なのかもしれない。

ひなたと川口が一緒にいないことを言う人は特にいなかったが、それでも影で何かを言われていることはわかった。

1度も喋らなかった。っていうか、1度も会わなかった。

このまま卒業してしまうんだろう・・・ひなたは漠然とそう思っていた。

「そんなのダメですー!!!」

ぼーっとしながら廊下を歩いていたひなたは、いきなり大声に驚いて顔を上げる。見るとそこには雪乃の姿があった。

「えっ・・・と、雪乃ちゃん？」

「私のせいなんです！」

何を言いたいのかわからない。ひなたが混乱していると、雪乃は半泣きになりながらひなたの肩を前後に揺らす。地味に目が回る。

「私が押してダメなら引けて言っちゃったから・・・」

「へっ？いや、あの・・・」

「だからぐっちゃん、ひなたちゃんのこと避けてるんですー！」

どうやら雪乃は自分のせいで、ひなたと川口が話していないと思っ
っているらしい。

「違うよ」

ひなたは静かに言い放った。

「雪乃ちゃんのせいじゃない。私がひどいこと言ったから・・・嫌
われちゃった」

その言葉を自分で言った瞬間、なぜか泣きそうになった。
今まで意識したことなかったが、避けられてるんだ。完璧に嫌わ

れてしまったのだ。

「雪乃」

誰かが雪乃の名前を呼ぶ。無意識に見ると、少し離れた所に有奈が立っている。

「安藤が捜してたよ。辞書返してほしいって」

「あ、やっぱ・・・忘れてました！」

雪乃が慌てて走り去っていく。後には、ひなたと有奈が残されたわけだが、もちろん話すほど仲良しなわけではないので、ひなたも立ち去ろうとしたときだった。

「誤解してるの？」

有奈の言葉に、ひなたは少し驚いて振り返る。

「・・・何を？」

「私と諒の関係。聞いたかもしれないけど、なんにもないからね」
諒という言葉聞いてどきっとした。だけど、平静を装ってこくと頷く。有奈は少しだけ笑った。

「でも、正直あなたには嫉妬してる。諒に気に入られてて」

どういう意味だろうか。そのままの意味で、ひょっとしたら有奈は川口のことを好きなかもしれないと思った。

有奈は廊下の壁にもたれかかる。遠くを見るような目つきだ。

「小さい頃からずっと一緒にいた。幼なじみってやつ。だから、つきあってるとかいえる言われてきたけど、私たちはそんなんじゃない。でも、中学生くらいになると背伸びしたがるのかな。自意識過剰だけど、諒は私のこと好きなかもしれないって思うようになったの」

そこまで言うと、有奈はため息をついた。

「実際は違っただけだね・・・」

「そんなのわかんないじゃないですか」

「わかるよ。1番近くで見てたんだから」

はにかんだように彼女は笑う。ひなたは胸がしめつけられるような錯覚を覚えた。

「——っていうのは冗談で」

「はい？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまった。有奈はふふつと笑う。

「何が言いたかったっていうと、私と諒はただの幼なじみだってことよ」

「まわりくどくないですか？初めからそう言ってくればよかったのに」

「ごめんなさい」

クスクスと笑いながら、有奈はひなたの背中を押す。

「・・・・・・・・？」

「諒は生徒会室にいるから・・・言いたいこと言っちゃえばいいの」

「・・・大事な幼なじみに文句言っちゃうかもしれないですよ？」

「どうせならサンドバックにしちやいなさい」

生徒会長とまともに会話したのは初めてだったが、こんなに碎けた人だとは思わなかった。

ひなたは駆け出す。川口諒に会うために・・・・・・・・

第15回 100回目の告白

生徒会室の扉を開ける。後で思えばノックの1つでもすればよかったと後悔したが、室内には川口と男性教諭の姿があった。

2人とともに目が合い、やばいと直感で感じ、

「失礼しました！」

何か言われる前にひなたはぴしゃっとドアを閉めた。自分でも驚くほど早業だと思う。

「大丈夫だよ。特に大事な用事があったわけじゃないから」

くすくすと笑って男性教諭が出てくる。眼鏡をかけた優しい先生で、確か名前は板倉といっただろうか。

「あ、いえ・・・私は生徒会の人間じゃないので・・・」

「でも何か用事があったんでしょ？先生はもう済んだから中に入るといいよ」

そう言つて先生は立ち去っていく。中途半端に半開きにされたドアから得体の知れないオーラが出ているような気がした。

しばらくドアを見つめる。ここからだとは中は見えない。

やがてそこから覗く1つの顔があった。

「・・・浅月さん？」

「――」
頭がぐるぐるする。そういえば何を言えばいいのか考えていなかった。どうしよう、どうしよう・・・

「そんな所に立ってないで、中に入りなよ」

とにかく、言わなきゃ。ごめんって？違う。でも、謝らなきゃいけないのは確かだ。こないだ謝ってなんて言われたんだっけ？えっ

と・・・えつと。

ドア付近に立つ。そこから入ってこようとしないひなたに、川口が不思議そうに見てくる。

「浅月さん？」

「——怒ってるよね・・・。」

ひなたの口から出た言葉はそれだった。他に何も思い浮かばなかった。

川口はしばらく何も言わずにいたが、やがてドアを閉めにこつちにやって来た。そして、ドアを閉めるとようやく口を開いた。

「俺・・・お祭りの日、あんな態度とっちゃってごめん。せつかくの花火が全然見れなくて・・・。」

「そんなの、私がひどいこと言ったからじゃん・・・。」

「俺はその前からずっと浅月さんに迷惑ばかりかけてたから・・・これ以上嫌われたくないよ」

ぶんぶんとひなたは首を振る。

「私のこと・・・好きなんじゃないの・・・？」

自意識過剰と言っていた有奈の言葉を思い出した。これもそうなのかもしれない。だけど、出た言葉を撤回することはできない。

「うん」

川口はしっかりと頷いたが、真剣な表情がやがて驚愕きょうがくの色に変わる。

「やつべえ・・・！言っちゃったよ！」

「何を！？」

「好きだつて言っちゃったよ！やべーよ！もう終わりだああ・・・。」

そんなの前から言っているじゃんと言いつつになった。だけども、あることを思い出した。

——100回告白してふられたらあきらめる・・・
もしかして、今ので100回目になったんじゃないだろうか。

「川口君」

「言わないで！ノー！聞きたくない！」

「聞いてよ」

「無理無理無理！きーこーえーなーい！」

「——好きなの！」

時が止まった、ように感じられた。あれほど騒いでいた川口が息を呑むのがわかった。

ひなたは言った。自分の気持ちを。最初からこれを言えばよかったのだ。

「嘘だ」

川口の開口一番がこれってどうだろうか。

「ありえない・・・ありえないよ」

「・・・そうかも。ありえないね。じゃっ」

「待つてよ！もう1回言つてよ！」

立ち去ろうとするひなたの腕をぐいっとなつかんで離さない。その途端に顔が赤くなるのを感じてしまい、今川口のほうには向きたくなかった。

「川口君と違って、何回も言えるわけじゃないって」

「・・・マジ？」

何に対してマジなのかわからなかったが、ひなたはこくと頷く。

「えっ・・・じゃあ、俺とつきあってもいいってこと・・・なの？」
少し間を置いてからひなたは頷く。その瞬間、がんと大きな音がした。振り返ると、弁慶の泣き所を押さえてうずくまっている川口がいる。どうやら何かの拍子に、足をぶつけてしまったらしい。
「・・・痛そう」
「いつ・・・痛い・・・でも夢じゃない」

痛みを我慢しながらもにこにここと微笑む川口に、なんだか笑えてきてしまった。

今、ここに1組のカップルが誕生した。

ローテンションで根暗な彼女と、ハイテンションでお調子者の彼氏という凸凹コンビだった。

第15回 100回目の告白（後書き）

題名が昔のドラマの名前と似ているような気がしますね。
内容は全然違いますけど……；；

ようやくくっつきました。まだ続く予定なのでよろしくお願いします。

第16回 変化

朝の混雑した電車を降りてから改札口へと向かう。いつもの行動なのに、今日はなんだか緊張していた。だって今は……

「浅月さん！」

ひなたを待っている人がいるから。

2人がつきあいだしてから数日が経過した。その間に変わったことはいろいろとあるが、まず一緒に登校するようになった。

この光景はひなたたちにとっては進歩したのだが、周囲から見ると特別なことではないらしい。一緒にいても何か言われることはなかった。

それから、お昼ごはんも一緒に食べるようになった。食べる場所は屋上でもなく、食堂でもなく、第2校舎の非常階段という人が誰も来ない場所だったが、そういう静かな所での食事のほうがひなたは好きだった。

と言っても、別に川口の分の弁当を作ってきているわけではないのだが。

「浅月さん」

「はい」

「っていつも呼んでるけど、これからは呼び捨てにしちゃだめかな？」

ひなたは深く考えることなく頷く。

「いいよ。浅月で」

「じゃなくて……」

何かが違うらしい。ひなたが困惑していると、川口が言いにくそ

うにもごもごと口ごもっている。いつもは言いたい放題なのに何を言おうとしているのだろうか。

「ひなたって呼んでいい？」

ああ、そういう意味かとひなたは納得する。

「だめかな！？」

「え、いいけど・・・」

「よっしゃ！ひなた！」

屈託なく笑う川口に対して、ひなたは顔が赤くなるのを感じた。

いつか自分も川口のことを名前で呼ぶときが来るのかもしれないと考えるとなんだか気恥ずかしくなってくる。だけど、悪い気はしない。

いつのまにかずいぶんと川口のことを好きになってしまったらしい。

この2人がつきあいだしたことにより、周囲の驚きはすごかった。いつもからかっていた仲のいい男子が「ありえねー」とぼやいていると、「すげーだろー」とか言いながら川口が得意満面な顔をする。どうやらいつもからかわれていたのに、初めて自分が優勢になったことで喜びが大きいのだろう。

生徒会の面々は、「やっとくつついたのか」という反応だった。いつ2人がくつつくのか彼らで賭けていたらしく、勝ったのは有奈だそうだ。

ひなたは有奈の言っていたことを思い出したが、結局真相はわからなかった。

彩香もおめでとうと言ってくれたが、それよりもひなた自身の変

化に驚いていた。

「どういう意味？」

「だからさ、ひなた最近明るくなったような気がする。いや、別に前が暗いって言うてるわけじゃないよ？川口君と関わるようになってからそう思うようになったっていうか……」

そうなのだろうか。だとしたらちよつと嬉しい。

そういえば、川口と喋っていると、会話を楽しいと思うようになっていた。前は苦手だったのに、たぶん彼が話し上手聞き上手なのだろう。自然とできる会話が心地よかった。

クラスは違うが、川口と話することができる登校の時間と、昼休みの時間はひなたにとって楽しみになっていた。

「えっ？進路？」

話の流れでそんなところに行き着くと、川口は驚いたように目を見開いた。むしろひなたはそんな反応をされるとは思わなかったの逆で驚いた。

「うん。川口君はこの大学に行くのかなって」

「うーん……実はまだ未定なんだよね」

季節は秋になろうとしている。この時期いまだに進路を未定としていることにますます驚かされた。そういえば、川口の成績について何も知らなかった。彼は頭がいいのだろうか。

「一応目星はあるんだけどね……」

「どこ？」

「……慶明大、とか」

県内のトップとも言える大学の名前を言われて驚いた。まさかそんなに偏差値の高い大学だとは思わなかったのだ。

ひなたは純粹に感心したが、川口はばつの悪そうな顔になる。

「俺の親が医者でさ」

「へ？」

「最初はその関係で目指してるって思われるのが嫌だったんだけど・
・・・やっぱ医者は俺の夢だし・・・慶明大には医学部があつて」
「すごい・・・そこまで考えてるなんて思わなかった」

「でも」

ひなたの言葉を遮るように川口は喋りだす。

「まだわかんない」

そのときの川口の表情が気になった。何をそんなに悩むのかはわからなかったが、本人が言いたくなさそうだったのでこれ以上追究するのをやめておく。いつか話してくれるときを待つことにした。

第17回 見知らぬ訪問者1（前書き）

新キャラ登場です。

第17回 見知らぬ訪問者1

茶髪の風来坊・・・とかいうあだ名がついたのは、たぶん高校のときだっただろう。積極的に何かをしたわけではなく、常にひょうひょうとした態度でいたため、教頭によってこのあだ名がつけられた。

「変わってねえな・・・」

自分が卒業してからもうどのくらいたつのだろうか。あの教頭はいるかな。より一層ハゲてんのか。生えてたらどうしよう。育毛したりして。

その男は今母校である南勢高校まで来ていた。

ここへ来た目的は人（教頭ではない）に会うためだった。本当はわざわざ母校を訪ねなくても会えるのだが、ちょっとしたウワサを聞いて、ぜひもう1人会ってみたい人ができたのでここまで来た。

「よしっ！行くか」

誰に言うでもなく、男は歩き出した。

4時間目の授業の終わりを告げるチャイムが鳴る数分前、ひなたは川口と一緒に弁当を食べる非常階段まで来ていた。今日はたまたま早く授業が終わり、ひなたが来たときにはまだ川口は来ていなかった。

代わりにそこに見知らぬ青年がいた。階段の踊り場で足を投げ出してうずくまっている。どうやら寝ているようだ。

誰だ、こいつ・・・

起こそうとは思わないが、ここで寝られても邪魔だ。仕方なく1つ上の階でごはんを食べようと川口にメールしようとしたときだ。
「ジョージ!!」

ひなたがびつくりして振り返ると、同じようにびつくりした表情で起き上がった青年の姿があった。焦点の合わない目で見られ、思わずたじろいしまった。

「思い出した・・・ジョージだよ、ジョージ! 教頭の名前。え、今もジョージなの?」

何を言われているのかわからずにひなたは目をぱちくりとさせる。どうやら教頭の名前を訊いているらしいが、なぜか声が出なかった。

「そんなわけないか。坂下譲二ジョージじゃないよね? 今は」

「え・・・つと、教頭は確かそんな名前だったと思いますけど・・・」

「うっそ! マジで? 後で挨拶してこよーっと」

何が嬉しいのか子供のように青年は笑った。大学生だろうか。やや茶色を帯びた髪にジーパンにパーカーというラフな格好をしている。端正な顔に、黒縁の眼鏡がよく似合っていた。

そのとき昼を告げるチャイムが鳴った。

「おっと、もう昼? そろそろ行かないとな。あつ、そだ」

青年はこそごととポケットの中から何かを取り出す。それは、1枚の写真だった。

「この写真の右にいる奴を捜してんだけど、知らない?」

知らないも何も、まずこの写真がいつ撮られたものなのか疑いたくなる。その写真に写っているのは、3歳くらいの男の子と10歳くらいの少年の入浴シーンだったのだ。青年の捜しているのは、3歳くらいの男の子のほうだった。

「・・・知りません」

率直に言っと、青年は困ったように笑う。

「だよ。あいつ写真とかあんまり好きじゃなくてさー、探してみたらこんなのしかなかったんだよー」

「はあ」

生返事を返したときだった。ひなたの視界の隅に何かが通り過ぎた。早すぎて見えなかったが、それが川口の昼ごはんだということに気づくのに時間はかからなかった。

「川口君・・・？」

しかし、川口はひなたではなく違う方向を見ている。その視線の先には――・・・

「おーっす」

茶髪の青年がひらひらと手を振っている。彼は子供のようになにここと笑うが、反対に川口は不機嫌な顔つきをしている。

「おーっすじゃないよ。なんでこんな所にいるんだよ、玲^{れい}」

「お前を捜してたんだ。まさかここで会えるとは思わなかったけどな」

「学校まで来なくても、直接家に来ればいいじゃんか」

「あー・・・ここに来たのはお前に会うためだけじゃなくてな・・・」

そこまで言うと、玲と呼ばれた青年がひなたのほうを見るのがわかった。しばらくじっと見られたが、やがて何かに気がついたかのように目を見開いた。

「もしかして、君が諒の彼女!？」

「え・・・あ、あの」

「ありえねー・・・超かわいいじゃん。諒にはもったいねー」

ひなたが戸惑って何も言えずにいと、ぐいつと強引に腕をつかまれた。見ると、まだ不機嫌な顔つきをしている川口がいた。

「ひなた、行こう。別の所でごはん食べよう」

「あ・・・でも」

「いいから」

いつも愛想のいい川口がなぜこんなに怒っているのかわからなかった。非常階段から落ちた昼ごはんを拾うことなく、2人はその後にした。

第18回 見知らぬ訪問者2

屋上には何人かの生徒がいた。川口は構うことなくひなたの腕を引つ張るので、さすがに恥ずかしくなつて手を振りほどいた。

「痛いよ！」

「あ・・ごめん！」

その表情がすぐく申し訳なさそうで驚いた。さつきはあんなに不機嫌そうだったのに、ギャップが激しい。

「さつきの人、知り合いなの？」

試しに訊ねてみると、苦笑いをしながら川口は頷いた。

「昔から知ってる・・・慶明大の准教授なんだ」

「え・・・教授!？」

一体いくつなんだろう。外見から大学生だと勘違いしたぐらいだ。年齢サギではないが立派に犯罪なような気もする。

「よかったの？なんか用があつたみたいけど・・・」

「いいんだよ。あいつと関わるとろくなことがないんだから。昔っからほんとにもー・・・」

その昔とやらを思い出しているのか、川口の表情が苦渋のものに変わる。よっぽどひどい何かあつたのだろうか。

そのとき、ひなたはさつき入浴シーンの写真を見せてもらったことを思い出した。あの玲とかいう人が川口を探しているのなら、あの写真の男の子は彼だということになる。

言うべきか迷つたがそのことを言つと、

「やばい!ごめん、ちょっと行ってくる!」

川口は一目散に駆け出していった。

川口が方々を探し回って食堂にたどり着いたときには、そこに人だかりができていた。その中央にいた高島は、

「——実はこの右側の男の子は……」

「ちよつと待ったあああ!!」

写真を見せびらかしている高島玲に飛びつき、川口は写真をもぎ取る。慌ててそれを見るとそこには――

「あれ……？入浴じゃない！」

その写真は川口が幼稚園の入園式のとくに、自分の母と一緒に撮ったものだ。

「ああ、それなら……」

「ごそごそとポケットを探る高島の腕をがしつとつかみ、川口は強引に引きずっていく。後で例の写真を取り上げなきゃと思いながら、

「にしても、どういう風の吹き回しだよ。わざわざここまで来て」

「ようやく人気がない空き教室まで連れてくると、川口は口を開いた。高島の本来の目的を訊ねるために。」

「だから言ってるだろ。お前の彼女を見に来たんだって」

「ほんとのこと言えよ!!」

「や、マジだから。有奈の気持ちにも気づかなかったお前の好きになる人ってどんなだよって感じで」

川口は意味がわからなくて首を傾げる。有奈の気持ちってなんだ？

「諒は有奈とつきあうと思ってたけど」

「そんなわけないだろ」

「わかってねーなあ」

川口の言葉に、盛大なため息をつく高島。その態度に川口はますます混乱する。

「まあいいや。彼女とはいつ出会った？めっちゃかわいい子だな」
「それよりここに来た目的を言えつての。俺だって暇じゃないんだからね。もう行くよ」

「わかったつて。じゃ、単刀直入に訊くけど、お前進路どうするつもりだ」

なんとなくそんな気はしていた。川口に進路の話をするとき、メルだとシカトされ、電話だと一方的に切られ、家の前で待ち伏せされれば帰ってこないという現実を繰り返されたため、とうとう学校に押しかけるといった強硬手段を高島は取ったのだ。

面と向かって話されれば、簡単に逃げることはできない。

「お前、称号もらってんだろ？学費払わなくていいんだから、それ相応のことはしろよ」

素直に頷けない。まだわからない。

生徒会のメンバーは、安藤を除いた3人が、成績優良者として称号をもらった。もらえると学費や入学金を払わなくて済むという利点があるのだが、この話をされることは川口にとって苦手なものだった。

「頭いい」「すごい」と言われるのは嬉しい。だけど、それ以上突っ込まれなくなかった。きつと進路の話になってしまっから。

「……ちゃんと考えてるよ」

それだけ言うと、川口は高島に背を向ける。「まだ話は終わっていない」と後ろから聞こえたような気もしたが、無視して屋上へと向かっていく。

そろそろ答えを出さなければならぬ——……………

その頃、ひなたは屋上にいた。川口を待っていたのだが、教室から持ってきた大学受験のパンフレットを手に取る。

最近考えるようになったこと。大学受験。ひなたの志望校は――

「ひなた？」

突然の声に驚いて振り返ると、そこには彩香の姿があった。いつものまにいたのか、しげしげとひなたの手もとを見ている。慌てて隠したが、時すでに遅し。

「慶明大受けるの？」

なんとなく恥ずかしくなつて俯く。慶明大は難関大学として全国でも有名だから、きつと無理だと思われるだろう。

「・・・いいなつて思つてるだけだね」

「そんなことないよ。へー・・・ひなたが受けるんだつたら私も目指しちゃうかな」

「ほんと！？」

心強い見方ができるかもしれないことで、ひなたは嬉しくなった。なんていったつて、彩香の成績は上位だ。一緒に勉強できるかもしれない。

「でもさ、なんでここにしたの？」

彩香の素朴な質問に、ひなたは曖昧に笑つてごまかす。

まさか川口と一緒にの大学に行きたいからなんて言えるわけがなかった。

第19回 見知らぬ訪問者3

高島玲が職員室を訪れたとき、まず最初に目に入ったのは……
・らつきよう形のバーコード頭だった。それを見た瞬間、脳裏に2
0年前の懐かしい記憶が蘇る。

「ジョージー!!」

「その声は……高島!」

名前を覚えていてもらえたことに驚いた。さすが教頭。自分が学生だったときからすでに教頭だ。っていうか、万年教頭なのか?

「いやー久しぶりじゃないか。茶髪の風来坊も今何歳になるんだ?」

「今年で38つすよ。ジョージ、まだ教頭やってんのかよ」

「その口ぶりも相変わらずだな。私は教頭という仕事に誇りを持ってるんだよ」

そのセリフは前にも言っていた。教頭も相変わらずなようだ。

周囲は学校で1番の古株の教頭とタメ口で話す男を不審がつているようだ。試しに観察してみたが、知っている人間は1人もいなかった。そりゃあそうだろう。自分が卒業してから20年もたつんだ。むしろ今も教頭がいることのほうが不思議だ。

「今日はどうしたんだ? わざわざ私に会いに来たわけではないんだろ?」

「そんなこと言っなよ。ジョージに会えて超感動してんだから。まあここへ来た目的は——」

高島は時計を見る。そろそろ時間になるだろう。

「これから果たしに行くんだ」

じゃーねと軽く手を振って、高島は外に出て行く。

最後まで失礼な言葉を振りまいていた問題児を職員室にいた教師がはらはらとした目で見ていた。

放課後、南勢高校に通う生徒のほとんどは正門を通って下校する。たまに裏門から出て行く者もいるが少数派だ。彼女が多数派であることを祈って高島は正門の近くに身を潜める。

「あ……………」

しばらく待つと覚悟していたのだが、思ったよりも早く川口の彼女——ひなたは現れた。彼女は高島と目が合うと、何かに警戒するような顔つきに変わった。

まるで猫のようだなと高島は思った。

「こんにちは。今ちよつと時間いいかな？」

「……川口君なら今日は生徒会の仕事があるって言ってましたけど」

本当に猫のようだ。まだ自分に対して警戒心を解いていないことがわかる。

「諒じゃなくて、君に用があるんだ」

「私に……………」

「そう。今日はお願いがあつて来たんだ」

ここは目立つから場所を変えようと言ってみた。一瞬、彼女に渋られると思ったが、意外にも素直にこくと頷いてくれた。彼女が懐いてくれたらすごく嬉しいだろうなと漠然と考える。

とにかく、高島は近くのファミレスに向かっていった。

「なんでも好きなもの頼んでいいよ」

と高島は言ったが、彼女が頼んだのはミルクティーで、飲み物の中でも1番安いものだった。

「なに遠慮してんだよ。諒なんかこの店で1番高いものの平気で頼むぞ」

「はぁ・・・」

どうもわからない。川口に彼女ができた人と人づてに聞いたときはどんな人かと想像したが、きっとあいつと渡り合っていけるくらいテンションの高い女の子だろうと思っていた。それがどうも違うらしい。

どっちかってーと、テンションは高くはないな。まあ、あいつにはこのくらいが丁度いいのかもな。

現に幼なじみの有奈もテンションの高いほうではない。

「それで、お願いってなんですか？」

いきなり核心をつかれてどきつとした。こんな所を川口にでも見られた日にはおそらく逆ギレされるだろうが、自分はこのために来たんだと高島は決意する。

と、そのときだ。彼女のバッグが視界に入った。それは、チャックが半分開いていて、そこからとある文字が見えた。

「慶明大学・・・」

無意識に読み上げると、彼女が驚いたように反応したのがわかった。

「目指してるの？」

「な・・・なんでわかるんですか!？」

鎌をかけてみると、彼女は驚いて目を見開く。

高島がバッグのパンフレットを指すと、彼女はようやくチャックが開いていることに気づいたらしい。あきらめたように頷いた。

「……私の学力じゃ到底無理だってわかってるんですけど……」

「でも目指してるんでしょ？なんで？」

意地悪な訊き方だったと後で思ったが、今さら撤回することはできなかった。彼女はあきらめたように頷いた。

「元々いいなって思ってたんです。でも、偏差値が高くて無理だつてあきらめてたんですけど、川口君が目指すかもしれないから——」

その言葉に驚いた。高島は高校へ来た目的——彼女に川口が医大に行くように説得してもらおうとしていたのだ。

「慶明大行くってあいつが言ってたの！？」

「行くっていうか、いいなって感じて言ってたんです。あんまり進路の話とか好きじゃなさそうだから聞いてませんけど……頑張れって言う代わりに私も頑張ることにしたんです」

説得してもらう必要なんてなかった。ここで自分が強要するより、彼女に任せたほうがいいような気がしてきた。

なんだよ……あいつ、すげー見る目あるじゃん。

それに、ここで自分が出しゃばったら、きっと川口に昔のことを思い出させてしまうだろう。あの嫌な記憶を——……………

第20回 決意

高島玲の突然の訪問の翌日、その日はあいにくの曇り空だった。午後から雨が降るかもしれない。

「傘持ってこればよかったなあ・・・」

ひなたは折りたたみ傘も持っていないことを後悔していると、いつものように駅の改札の前で待っていてくれる川口の姿が目に入った。

昨日、高島と話し、あるお願い事をされた。

『今日俺と話してたことは諒には内緒ね。それと、君の進路のことあいつに話してみてほしいんだ』

どういう意味なのかわからない。ひなたは自分の進路のことを話すことに抵抗があったが、川口自身避けているような気もする。

それから、川口の成績と称号についても高島に聞いた。

川口は学年で1位2位を争うほどの成績優秀者で、学業特待生という名目で称号をもらったのだという。よく考えればわかることなのだが、なぜかそれを知る者は少ないように思われる。

ちなみに、争っている相手は有奈だとか。

「ひなた、どうかした？」

はっとして我に返ると、不思議そうな顔で川口が見てくる。話している最中に別のことを考えていたらしい。ひなたは慌てて首を振る。

「ちょっと寝不足でさ」

「もしかして夜な夜な勉強でもしてんのかよー」

夜な夜なって・・・ちょっと言葉が変じゃないだろうか。

それにしても、川口のほうから勉強の話が出てくるのは意外だった。いつも話していても、この手の話題にだけはならなかったのに。「そっちはどうなの？はかどってる？」

「・・・・・・ひなたはこの大学にするの？」

質問を質問で返されてひなたは戸惑う。ついにこの質問がされるときがきたか・・・・・・

「慶明・・・・・・」

ぼそつと呟くと、すぐに「えっ？」と驚きの声が返ってくる。ひなたは気まずくなつて視線をそらす。

「む・・・・無理だつてわかつてるよ！」

「ひなた！？」

逆ギレだとはわかっている。そんなひなたをおろおろと川口がなだめようとしていた。

「だけど、川口君が頑張るんなら、私も頑張ろうと思ったの！以上！」

丁度高校の正門前に来ていたので、何か言われる前にダッシュで入っていく。高島に進路の話をしてほしいと頼まれたが、一方的に言つて逃げるといふ結果になった。

放課後、予想通り雨が降った。いつもは歩いて駅まで行くのだが、お金がもったいなかったが今日はバスを使つて帰ることにした。

人通りのあまりない場所にバス停がある。ひなたはそこにある長イスに座つて10分後のバスを待った。

傘持つてくればよかったな・・・・・・胸中でばやく。

そのとき、誰かの足音が聞こえた。何気なくそちらを見ると、そ

こには折りたたみ傘と思われる黒い傘を持った川口の姿があった。

「・・・川口君」

「なんとなくここかなって・・・ひなた、帰りバスかもしれないって朝言ってたから」

にこにこ笑って隣に座る川口。朝そんなことを話した覚えがなかった。別のことを考えながらそんな器用に会話していたらしい。

なんとなく気まずい空気が流れる。雨音がやたら大きく感じられた。しかし、

「ひなた!!」

「はいっ!」

突然大声で名前を呼ばれてびくつとする。見ると川口が真剣な表情でこつちを見ている。

「俺・・・俺も慶明目指すよ!!」

「え、あ・・・うん」

そうだと思っていたひなたはなんだか拍子抜けした。しかし、彼にとってこれは一大決心だったらしい。

少しだけ寂しそうな表情で川口はそれを語った。

「10年以上前の話なんだけど・・・俺の目の前で女の人が倒れたんだ。その人妊娠しててさ、母子共に危ないって言われながらも産むって決めてたんだ。周囲からはだいたいぶ反対されてみたいで・・・だから倒れたとき、助けを呼ぼうとした俺の手を必死につかんで、呼ばないでって言って離さなかった」

子供をとられなくなかったから・・・と川口は続けた。

「俺は動くことができなかった。そのうち、その人の力が弱まってきたから助けを呼びに行った・・・手遅れだった。その人も・・・お腹の赤ちゃんも」

ひなたは息を飲む。今まで知らなかった川口を知ってしまった。
「周囲は俺のせいじゃないって言ったけど、今でもどうすればよかったのかわからない。怖くなったんだ。命っていうものに対して……」

そのとき川口がこちらを見る。

「だけど、ひなたが頑張るって言うんなら、俺も頑張る……やっぱり医者になりたいっていう気持ちに嘘はつけないからさ」

「わ……私、そんな理由……たいしたことない理由だよ……」

「わかってる。俺と一緒にいたいんでしょ？」

驚いて何も言えずにいると、ようやく川口が苦笑した。

「超嬉しいな！」

「ちが……別にそういうわけじゃ……！」

じりじりと川口が近づいてくる。

「まあまあ。そんな力いっぱい照れなくてもいいじゃないかい」
少しずつ隅に追いやられるひなた。

長イスの背もたれに左手をつき、川口は右手でひなたの頬を押さえる。そして、ゆっくりと顔を傾けて近づいてきて……

プップー

お約束。そこにはバスが到着していた。よく見ると運転手のおじさんが困ったように笑っている。他に乗客もいるようで、一瞬で恥ずかしくなった。

「あとちよつとだったのに……！」

そう嘆く川口を置いて、ひなたは真っ赤になった顔を押さえてバ

スに乗った。

第20回 決意（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

唐突ですが、作者の体調があまりよくないためにしばらく更新を控えさせていただきます。

ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願いします。

第21回 クリスマス前夜1

季節は過ぎていく。

ひなたたちは本格的に受験勉強を始め、いつしか12月に入っていた。授業ではセンター試験対策が行われ、日々過去問をやる時が続いた。

南勢高校は県内でもトップクラスの高校だったが、堅苦しい生徒が集まっているわけではなかった。だから、普通に冬休みの計画をたてていたりする。

「クリスマス、どうする？」

ひなたたちも例外じゃなかった。昼休み、うきつきとサンドイッチをかじりながら川口が訊ねてくる。

「どうするって……勉強？」

「えええええ……デートしよーよ！」

そういえば、つきあい始めてからデートらしいデートをしたことがなかった。行くも行っても勉強するために図書館に行っただけで、色恋には程遠い。

むーつとふてくされる川口を見て、ひなたはもごもごと呟く。

「クリスマス……別に、ヒマだけど……」

「えっ！今なんて言った!？」

「だ、だからクリスマス……ヒマかも」

「なになに!？聞こえない」

最近の川口は新たにからかうという技術を覚えたらしい。ひなたがむきになって怒ると、嬉しそうに笑うのだ。だんだんお互いの性格が変わってきているように思えてきた。

「もういい。ごちそうさまでした」

「あ、ちよつと待って！冗談だって！」

慌てて川口はひなたの腕をつかむ。立とうとしたが強引に座らされた。

「俺、行きたいところあるんだ！」

「どこ？」

「駅前のイルミネーション。夜になるとライトアップされて綺麗なんだって」

子供のように笑う川口。ひなたは今まで怒っていたことを忘れて、その話に興味を持った。

「行きたい」

ひなたが笑うと、川口も嬉しそうに笑った。本当にいつもいつもにこにここと屈託なく笑う男だ。

「うん。じゃ、約束ね」

「破ったらスクワット200回だから」

「げっ・・・マジ？」

だけど、スクワットをすることになりそうなのはひなただった。

『今日休み？』

という川口のメールは、12月23日の補講日に届いた。その頃ひなたは家にいた。

『風邪ひいたっばい。今日は休むね』

その後にメールが返ってくることはなく、薄情だと思いながらベツドの中でふて寝することにした。

せめて約束している明日までには治さなきゃ、ほんとにスクワッ

トすることになってしまっ

ピンポン

家のインターホンが鳴る。1階にいたひなたの母が出るのがわかった。

「ひなたー」

声が聞こえる。誰か友達でも来たのだろうか。だけど、こんな姿で外に出られるはずがない。

数分後、階段を上ってくる音を聞いてひなたは焦った。まさか中に入れる気なの？焦ってマスクを探すが、それよりも先に部屋の扉が開いた。

「ひ・な・たー……」

やけににやにやとした顔で母が入ってくる。嫌な予感がする。

「あんた、いつのまに彼氏なんてできたのよ……しかもあんなにかっこいいなんて」

「えっ……へ？」

混乱していると、部屋の外に人がいるのが見えた。入ろうか入らないか迷っている様子の川口だった。

「川口君!？」

「お見舞いだって」

「お見舞い!？」

「じゃ、私はパートに出かけてくるから後は若い2人でごゆっくり・
・」

やたらテンションの高い母はにやにやと笑ってから、川口に中に入るように促した。

「咳はしてないから大丈夫だとは思っけど、ひなたマスクしなさい

よ」

出て行くときに、ようやく配慮の言葉を母は残した。

「わかってるよ・・・」

ひなたは渋々マスクをつけた。

ひなたの部屋はもしかしたら風邪の菌が充満しているかもしれないな
かったから、リビングに下りることにした。

「ごめん。いきなり来ちゃって迷惑だった？」

「ううん。お見舞いに来てくれたんでしょ？」

川口はこくと頷く。

「ありがとう」

そのとき、川口がぱあっと明るくなって喜ぶのがわかった。本当に
犬のように喜怒哀楽を表現するなあといなたは思った。

でも、せめて連絡くらいしてほしかった。来るとわかっていたの
ならこんなダサイ服を着ることはなかったのに。

「でも風邪うつっちゃうかも・・・」

「大丈夫だよ。帰ったら手洗いうがいちゃんとするし！」

川口はどすつとソファに座る。

「お母さん、ひなたとはまた違ったタイプの人だな」

「テンションがいつも高いの。川口君と気が合うかもね」

っていうか、うるさいのが倍層するだけかとも思いつながら台所に
行こうとすると、慌てた様子で川口が追いかけてきた。

「風邪ひきさんは座ってて！俺がお茶淹れる」

「大丈夫。お客さんこそ座っててよ」

・・・・・・・・・・

結局、言い合ううちに川口がお茶を淹れることになって、ひなたはおとなしくソファに座ることになった。ひなたは静かな部屋の中で、時計の針の音がやたら大きく響くのを感じていた。

「はい、お待たせー」

熱いものは苦手だったが、ひなたははずっとお茶をすすろうとする。

「2人きりだねー・・・」

ぶっ――

何気なく吐かれた川口の言葉に、ひなたはお茶をふいてしまうところだった。

第21回 クリスマス前夜1（後書き）

ずいぶんお休みしました。

また書き始めるのでよろしくお願いします。

第22回 クリスマス前夜2

誰もいない昼下がりの家。恋人同士2人きり。やることといえば・
・・・・

「あつ・・・また抜かされた!」

「よっしゃー!このまま一気にゴールだ!」

テレビを目の前にしてゲームだった。

「甘いよ・・・私にはまだ奥の手があるんだから」

そう言っただけは自称奥の手で、自分のキャラの運転するカー
トの速度をマックスにした。そして、容赦なく前を走っていた川口
を抜かしていく。

自分のゲームとはいえ、大人気ないことこの上ない。

でも、ゲームに熱中してないと意識してしまうのだ。さっき川口
が言った一言を。

『2人きりだねー』

何ヶ月か前にキスをされそうになったことを思い出した。あれか
ら特になにもないが、ひなたも考えなかったわけではない。

また思い出して顔が赤くなりそうになる。

「ひなた、風邪のほうは大丈夫なの?」

「え、あ、うん。大丈夫。ちょっと熱っばいだけだから」

風邪をうつしてしまうことだけが心配だったが、マスクの力を信
じるしかない。

と、そのときだ。川口がゆっくりとこちらに近づいてくるのがわ
かった。

「わっ・・・待って!」

意識してただけに、ひなたの行動は早かった。と言っても、体を縮めることしかできなかったが。

気がつくと、川口の手が額に触れていた。

「……………熱あるのかみようとしたただだよ」

「あ……そっか」

「ひなたー、キスされると思ったんでしょー？」

はーんと得意げな顔でそんなことを言われ、凶星だったひなたは挙動不審になる。とても恥ずかしかった。

「いくら俺でも風邪で弱ってる人間を襲うようなことはしないよ」

苦笑しながら川口はぼんぼんとひなたの頭をなでる。

「でもじきに襲っちゃうかも。今だって彼女の家にいると思うだけでどつきどき」

「女子の部屋に入るのは初めてじゃないでしょ？」

「有奈んちに昔はよく行ったけど、別に緊張とかそういうのじゃないしなあ……」

そういえば、ここに入ってくるとき、川口が最初に会ったのは母だ。きつととても緊張しただろう。

「ねえ、ひなたの部屋、もっかい行ってもいい？」

川口の申し出に、ひなたはいいよと答えて2階へと向かった。

「やっぱダメ！」

部屋を目の前にして、ひなたは入ろうとしている川口を制止する。

「えっなんで？いいって言ったじゃん」

「ダメだよ……部屋汚いし、それに風邪菌が充満してるから……」

「！」
とか言ってる傍から川口は勝手に部屋を開けてしまう。ひなたはもっと部屋を綺麗にしておくべきだったと後悔した。

「ひなたの匂いがする」

「どんな匂いよ」

「俺の好きな匂い」

さらりと言われて、ひなたは返す言葉がなかった。

川口は辺りをきよろきよろと見渡してから、何を思ったのかごそごそと持っていた青い袋から何かを取り出す。

「――？」

ひなたが見ていると、川口はたんすの上に小さな花束を置いた。

「これ――」

「お見舞いには花かなって思ったんだけど・・・果物とかでもよかったね」

照れくさそうに川口は言う。普段こっぴどかしいことを平気で言うくせに、こういうことは恥ずかしいらしい。

「なんつーか・・・俺ジェントルマン!？」

「うん。ジェントルマン、ジェントルマン」

「なんかすげー淡泊な言い方じゃね？」

「気のせいだよ」

ひなたは内心の気持ちを悟られないように極力平静を装う。昔は感情が表に出なかったのに、川口とつきあってからおかしい。すぐに顔が赤くなってしまう。

「わっほーい！」

ひなたがいろいろと考えている間に、川口はベッドにダイブする。

緊張してるとか言っていたくせに。

「明日大丈夫そう？」

いきなり心配そうな顔で聞かれてひなたはきよとした。

「うん。スクワットはやだしね」

「ほんとに『川口君と一緒にクリスマス過ごしたいから』って思ってた？」

「しないな」

いつのまにかひなたは熱っぽく感じていたのを忘れていた。

いつのかにかだいぶ時間が経過していた。

いつのまにか川口をこんなに好きになっていたらしい。

いいと断られたのだが、ひなたは行くといい張って、近所のバス停まで来ている。川口を送るためだ。

「ひなた」

名前を呼ばれて振り返る。

「大学に合格したらさ、俺んちおいでよ」

「うん、じゃ行く」

ここまでなら普通の会話なのだが、

「何年後になるかな」

ぼそつとひなたが呟くと、一気にその温度が下がったように感じられた。

「そんなこと言っなよ・・・」

明日はクリスマスイブ――

第22回 クリスマス前夜2（後書き）

クリスマスとイブをごっちゃにして使っています。
深い意味はないのであまり気にしないでください；

第23回 クリスマス（前書き）

正確にはクリスマスイブです。
ごっちゃんにすいません。

第23回 クリスマス

「ごめん……」

開口一番に言ったひなたの言葉に、電話の向こうの川口がショックで一瞬言葉が出ないでいるのがわかった。

昨日のひなたの風邪はあれからまた熱が上がってしまい、翌日になったクリスマスイブの今日も一向によくなる気配はなかった。このままデートして風邪をうつすくらいだったら、むしろ会わないほうがいいとひなたは判断し、川口に電話したのだ。

「——うん。わかった……あつ、またお見舞い行ってもいい？」

「だめだよ……うつるかもしれないし」

「いいよ。勝手に引っちゃうから」

そんなこと言われても、ひなたがどんな思いで今電話していると思っているのだろう。軽い風邪だったらたぶんデートに行っていたはずだ。

結局曖昧なまま電話は切れた。クリスマスイブだからといって家に誰かいるわけではなかったが、川口が来るときのことを考えてひなたは掃除を開始した。

てつきり昨日のように家に入ってくるものだと思ひなたは考えていたが、そうではなかった。川口は家に着いてすぐこちらに連絡を入れてきた。

「やつぽー！来ちゃった」

2階の窓から下を見下ろすと、原付にまたがっている川口の姿が

見えた。

「あ、待つて。今下行く」

『うつん。いいよ。顔見たかったただだから』

下に行きかけたひなたを川口は制する。

『メリークリスマス・・・会えてよかった』

急にそんなことを言われて、ひなたは不覚にもどきっとしてしまつた。それと同時に、なんだかとても寂しくなる。

ひなたは窓から身を乗り出した。

「行くから・・・そこで待つてて！」

川口の返事を聞くことなく、ひなたはケータイを切つて階段を駆け下りた。

なんとか息を整えてドアを開ける。一瞬、ドアを開けたら川口がいなくなっているなんてオチも考えたが、彼はそこにいてくれた。ほっとして一歩前へ踏み出す。

「——！？」

外気の寒さはハンパじゃなかった。

「見てるだけで寒いよ！」

慌てて川口が駆け寄つてきて、ひなたを家の中に押しやる。それと同時に川口も家の中に入ったが、

「ごめん！俺別にそんなつもりじゃないんだよ！？ほんとに顔見に来ただけで！」

どうやら家の中に入ったことを言っているらしい。その慌てた様子にひなたは苦笑した。

「わかつてる。それだけで嬉しいよ」

「えっ？嬉しい？今嬉しいって言った？」

「・・・言つてないよ」

しつこく食い下がる川口を置いて、ひなたは先に家の奥へと入っていく。その後ろを川口が遠慮がちについてきた。

やばい……緊張する……

昨日も川口と2人きりになったのに、今日はさらに緊張する。クリスマスイブの力つてすごいと思う。だから、

「ひなた」

名前を呼ばただけでどきっとしてしまう。

「な……なに？」

「熱はどのくらいあるの？」

「あ、熱か……」

少し拍子抜けというか安心しながら、ひなたは体温計を手にする。計ってみると37.3と表示された。

「だいぶ下がったみたい」

「でもまだちょっとあるね。今日も安静にしてたほうがいいよ」

川口の言い方は、もう帰ると言っているようだった。

「そ、うだね……」

少し沈黙になった。

ひなたは俯いて様々なことを考える。もし次に川口が何か言うときは、それが帰るときのような気がしていた。

できればもうちょっとここにいてほしい。だけど、こんな風邪菌の充滿した家にいてもらいたくないし……

と、そのときだ。

「わっ——」

いきなり川口に手をぎゅっと握られて、思わず振りほどいてしまった。

「あ、ごめん。びつくりした？」

「う・うん」

「プレゼント。ほら、クリスマスの」

川口から渡されたのは、長細い箱だった。開けてみると中からは小さなハートのついたネックレスが出てきた。

「わー……」

「女の子の好みとかわかんないんだけど、ネックレスとかだったらいいかって」

いつもは平気で好きだ好きだと言うのに、こういうときに川口は照れくさそうにする。それがわかって、さらにひなたは嬉しくなった。

「ありがとう……大事にする……」

「うん。メリークリスマス！」

「メリークリスマス……」

ひなたも用意しておいたプレゼントを渡した。散々迷って買ったのは、財布だ。全く好みなんてわからなかったのに、我ながらよくこれを選んだと思う。

「わー財布だ……かっこいい」

「ほんとに？かっこいい？」

「うん！ありがとう。すげー嬉しい」

川口が笑顔になる。それだけでひなたも笑顔になれた。

30分ぐらいして、川口は帰ると言い出した。もちろん引き止めたかったが、川口の体調を考えるのなら仕方がない。

「じゃーね、ひなた。お大事に」

「うん。今日はありがとう・・・それと・・・ごめんね？」

「いいよ。早くよくなってくれれば」

川口の笑顔にきゅーんとなっていました。もしこれで本当に風邪をうつしてしまったらどうしようかと本気で心配になってきた。

「それに、謝らなきゃいけないのは俺のほうかも」

「――？」

「ひなた、はい！深呼吸ー！」

いきなりそんなことを言って、川口はひなたのマスクを取り上げる。意味のわからないままひなたは冬の外気を吸い込む。とは言っても室内だから冷たくなかったが。

何を謝られるのだろうか。まさか別れるなんて言われないうるか・・・

「怒らないでね？」

「何を――」

言いかけた瞬間、唇が塞がれた。川口の唇によって。

「――」

唇を離れた川口はイタズラっぽく笑った。

「じゃーね！今度は初詣で会おうね！」

一方のひなたは顔を真っ赤にさせてその場に固まっていた。

第24回 カウントダウン1

「むー・・・なんか足んないですー」

マフラーの両端を無意味に引つ張りながら、生徒会のメンバーである雪乃が呟いた。

その傍らには寒さで固まっている安藤と、反対に軽装の有奈の姿があった。

「なにが？」

安藤が答える様子がないので、有奈が返事をする。

「いつもはここにぐっちゃんがいたのに・・・」

今日は大晦日。それももう少してカウントダウンが始まる。

去年と一昨年は、生徒会のメンバーと一緒に初詣に行った。来年も一緒に行こうねと約束したことを有奈は思い出した。

「まあ、しょうがないじゃん。諒は彼女と一緒に行ってるんだから」「それはわかってるんですけど・・・なんかぽっかり穴が開いたよ」
うな気がして・・・」

雪乃の言いたいことはわかる。ほとんど生徒会で行動していたせいか、1人欠けるとその分穴を感じてしまうのだ。

でも、雪乃はまだましなほうだと思う。有奈は小さい頃から川口と一緒にいたから、急にいなくなつたその穴はもつと大きかった。

そのとき、今まで黙っていた安藤がゆっくりと顔を上げた。

「やっべ・・・凍死する」

「もー！安藤は気楽です！もう大学も決まっちゃったし！」

「ごめんって。なんかうまい具合に決まっちゃってさ」

安藤は在学中の部活動の成績によって、すでに大学の推薦試験に

合格している。この辺りでは有名な慶明大学だ。

ちなみに、雪乃もずいぶん昔から慶明大を目指していた。しかし、模試の結果がいまいち良くないことと、安藤が先に合格したせいで少し焦っているのだろう。

それから——もう1つ理由があることを知っているが、有奈はそれを言おうとはしなかった。

「そろそろ行こ。神社混んできちゃうよ」

有奈がそう言つと、急にぱつと表情を明るくさせた雪乃が「レッツゴー！」と言って先導していった。

「うわー。人いっぱいです」

予想通り。神社は大勢の参拝客でこった返していた。

「あ、あつちで甘酒もらえるみたい。行こうぜ」

「私も行きます！」

安藤の後を追っていく雪乃。

有奈は2人の後姿を見ていたが、ふと視界の片隅に見知った人間を見つけて、思わず息を呑んだ。

——高島玲^{れい}だった。

彼は寒そうに手をポケットに入れて猫背で歩いていたが、こつちの存在に気づいて手を振ってきた。

「久しぶり。元気だった？」

「元気です。高島さんこそお元気でしたか？」

「あいかわらずだよ。1人寂しくカウントダウン」

高島は笑って肩をすくめた。茶髪で容姿も整っているため、その仕草は様になる。

「有奈、友達は？」

きょんとした表情で高島は訊ねてくる。当然だろう。

「甘酒もらいに行つたみたいです」

「そうかあ。じゃあ、戻ってくるまで俺とデートしようか」

大学准教授だとは思えない言動。昔からちつとも変わっていない。有奈が高島と知り合ったのは、川口の父親が開業している病院で、高島が何年か前に働いていたときだ。川口について病院に行つたときに、恋人同士なんじゃないかとかかわれたことをよく覚えている。

「今年ももう終わりだなー」

空を仰ぐように高島が呟く。

「今年はいいいことがあつたな、俺。諒を医大に行かせることができた」

「・・・正直、驚きました。諒が慶明行きたいって言ったときは」

10年以上前のことだ。小学校1年生のとき、川口は1人の女性の死を目の前で見た。彼女は妊娠していて、元々母子共に危険だったそう。周囲から反対されていて、何かあつたらすぐに母親の体を優先するという約束で産むことを許されたらしい。

そして、あの日、助けを呼びに行こうとする川口を、彼女は止めた。

そういう人だった。高島玲の奥さんは――

「・・・親の後を継ぐんだって張り切ってたのに、あの日以来一切そんなこと言わなくなつたし・・・あいつは俺に負い目感じてたみたいけど、もしあのことで誰かが悪いとしたら・・・そこ

まで彼女を追い詰めた俺なんだと思う・・・」

有奈は何も言えなかった。どう答えても、それは慰めにもならないことをわかっていたからだ。

「だから、諒をその気にさせてくれたあの子に感謝してる」

それが誰なのか有奈は知っている。

自分ではできなかった。どうするべきなのかもわからなかった。だけど、後から出てきたひなたは、きっと何もわかっていないのにそれをやってのけてしまった。

正直悔しかった。

「——ごめん。こんな話するつもりじゃなかったんだけど」

ぽんぽんと頭をなでられると余計に身に染みる。

高島は自分の気持ちに気づいていることに。

わかってた。最初から。今さら気づいたわけじゃない。

川口諒が好きだったなんてこと——

第25回 カウントダウン2

12月31日。大晦日。

「今年もあと1時間だね」

「そうだね」

川口の言葉にひなたは頷く。いつものようになんでもないように振舞う。

だけど、意識せずにはいらなかった。こないだ不意打ちでキスをされたことを――

「ひなた？なんかあった？」

「はっ？なにが？」

きょんとした表情でそう訊ねられ、ひなたはどきつとした。

「なんかいつもと違うっていうか・・・」

「気のせいだって」

「そう・・・？」

しかし、川口の態度が全く変わらないことが気に食わない。怒らないでと言われたが、怒ってやろうかと本気で思ったところで、ひなたはある人物を見つけた。

「あれ・・・って雪乃ちゃんじゃない？あと・・・安藤君」

「わっ！ほんとだ。あの2人も来てたんだ」

生徒会の2人を見つけて、川口は純粹に驚く。

「俺、去年も一昨年と一緒にいったんだ。生徒会のメンバーで」

「・・・今年はよかったの？」

ひなたの質問に、川口は難しそうな顔をした。こういうところは

正直だと思う。

「いいよ。2人のところ行こっか」

ひなたにしてみれば割といい提案だと思ったのだが、何を思ったのか川口はひなたの腕を引く。

「あの2人の邪魔しちゃ悪いよ」

邪魔？っていうことはあの2人・・・

思わぬ事実を知って、ひなたはへーと感心した。

「一応そういう遠慮はするんだ」

「失礼な！俺だってそういうことくらいできるよ！」

「はあ」

もはやひなたを象徴するといっても過言ではない「はあ」という気のない返事。

川口は悔しそうな顔をしていたが、すぐににこつと笑った。

「まあいいや。ひなた、怒ってないみたいだし」

「怒る・・・？」

一瞬なんのことだかわからなかったが、すぐに何を言われているのか思い当たって、不覚にもかあつと赤くなってしまった。

「あ、照れてる〜」

「照れてない。それにすぐ怒ってるから」

「えっ・・・怒ってる・・・？」

まるで子犬のようにしゅんとされれば、ひなたは自分が悪者のように思えてくる。

川口が申し訳なさそうに謝ってきそうだったから、その前にぼそぼそと呟いた。

「・・・別に怒ってないから」

「え？」

「怒ってないし、照れてるだけだから、気にしないで」
「う．．．うん。はい！気にしません！」

急にテンションを上げて無意味に敬礼をする川口。本当にお調子者で、そういうところがいいところなんだと思う。

カウントダウンが始まる。

—— 5、4、3、2、1．．．

「あけましておめでとう！！」

ひなたと川口は同時にそう言った。

「そうだ！せっかく来たんだから参拝しようよ」
「うん。いいよ」

川口の提案で、2人は長い列に並ぼうと歩き始める。
そのとき、ふいに川口の手がひなたの手に触れて、気づいたときには手を繋いでいた。

「――」

見上げると、照れた顔をあさつての方向に背けて歩く川口がいる。
手袋越しに感じる手の感触。ひなたはぎゅっと握り締めた。

今の願いごとは．．．．．

大学に合格すること。川口と一緒にいられること。

どうか神様、2つの願いを叶えてください．．．．．

「長い願いごとだったな」

ひなたと川口が参拝する少し前、安藤と雪乃が参拝を終えた。

「安藤と違って、女の子にはいっぱい願いごとがあるんです」

雪乃は安藤の言葉にっーんと顔を背けて言い放つ。

「でも、シヨックです。どうして有奈ちゃん帰っちゃったんだろう・

・

「……まあ、なんか用事でもあったんじゃないの？」

本当のことを言うと、安藤はなんとなくその理由に気づいていたような気もするが、あえて考えないようにしていた。

「あーあ……結局安藤と年越しですねー」

「なんだその言い方は。光栄に思えって」

「えええ……」

口調は冗談っぽいけど、雪乃はどこかテンションが低い。その態度に腹が立って、思わず呟いた。

「……ぐっちゃんは来ないよ」

「え……？」

「いつまで待ってるつもりなんだよ」

しばらく雪乃はきょとんとしていたが、やがて顔を紅潮させて俯いてしまった。それを見て、安藤は内心かなり後悔した。

しまった……こんなこと言っつもりじゃなかったんだけど・

・

雪乃はゆっくりと口を開いた。

「私がぐっちゃんを好きだと思ってたんですか……？」

「——？そうじゃないのか？」

「……バカ」

「はあ!？」

そのときの雪乃が見せた表情はいつもと違っていた。例えて言うなら、とても悲しそうな……

安藤は雪野の気持ちに全く気づいていなかった。

第26回 生徒会長の異変（前書き）

遅くなつてごめんなさい！

第26回 生徒会長の異変

3学期。

生徒会の準備があると言って、今日は川口と一緒に登校してこなかった。

ひなたは1人下駄箱で靴を履き替えていると、思ったもみなかった人物に出会った。

「え・・・有奈さん？」

今日は生徒会があるから先に行くと言われたのだ。生徒会長が今さら登校なのだろうか。

有奈は眠そうな目でこっちを見ると、わずかに微笑んだ。

「寝坊したの」

「寝坊？あー・・・そうなんですか・・・」

それ以上の反応がわからず、ひなたはつつこむことなく教室に向かおうとする。

「ひなたさん」

いきなり名前を呼ばれて、少し驚いた。振り返ると、何か言いくそな表情で有奈が立っている。彼女のこんな表情を見たのは初めてだった。

「・・・はい？」

「——いいえ。なんでもないわ」

目を伏せ、有奈は歩き去ってしまう。最後までなにがなんだかわからずにひなたはその場に立ち尽くしていた。

始業式は普通に行われた。

生徒会長の有奈の様子が少し気になっていたが、いつもと変わりがなく生徒会として式を進行させていたのではとした。

あのとき、有奈は何を言いたかったんだろう・・・

「ひなた」

式が終わってすぐ、小声で川口に呼ばれた。手招きして体育館の外に来るように言っているらしい。

「どうしたの？」

「へへっ。ちょっとだけならいいかなーって」

嬉しそうに笑い、体育館の壁を背にして座り込む。ひなたもそれにならって隣にしゃがむ。

「これ、おみやげ」

「――？ありがとう。どっか行ってきたの？」

「うん。ばーちゃんち。京都なんだ」

おみやげは八つ橋のようだ。大好物だったので、ひなたは感謝して受け取った。

しばらく沈黙になったと思ったら、川口がこっちを見ていることに気づいた。なんとなく気づいていないフリをしていたが、目のやり場に困ってしまった。

「・・・なに？」

「いやー？もうすぐ卒業だなーって思ってたさ」

「そうだね・・・」

たとえ大学に落ちたとしても、高校は卒業しなければならない。もう今までのようにはいかないんだ。

なんか寂しいな・・・

今までだったらそんなに感じなかった感情だ。川口とつきあうよ

うになってから少しずつ変わりつつある自分にひなたは気づいていた。

「川口君・・・生徒会の仕事いいの？」

「やっべ！そろそろ戻らないとだ！」

慌てた様子で立ち上がった川口だが、何を思ったのかくるとこつちを振り返った。

「名前で呼んでよ」

「名前？」

「うん。諒って。川口君は固い！」

それだけ言うと、川口は体育館の中に消えた。

ひなたは「諒」と呼ぶ自分を想像して、少し気恥ずかしくなってしまった。

「ぐっちゃーん！遅いですー！」

「おっせーよ！」

後片付けをしている安藤と雪乃にどつかれて、川口は苦笑してやり過ぎす。

ふと、あることに気づいた。

「有奈は？」

「体調が悪いから保健室に行くつてよ」

「ふーん・・・」

無意識に保健室の方角を見て、川口は昔のことを思い出していた。有奈が保健室に行くときはよっぽど体調が悪いときなのだ。

「ねえ、俺ちよつと様子見に行つてきていいかな？」

「そう言つてぐつちゃん、サボる気ですか？」

雪乃がほつきを持つてじろりと睨んでくる。

「そんなじゃないよ。すぐ戻るから」

返事も聞かずに川口は体育館を後にした。

保健室に入ると、ちようど荷物をまとめていた有奈と目が合った。
どうやらそのまま帰るようだ。

「有奈？大丈夫？」

「・・・ちよつと風邪ひいたみたいだから、今日はもう帰るわ。ごめんね」

「うっん。あ、送つてくよ」

今日は原付でそのまま学校に来たし、有奈の家は割と近い。だから、ちよつとぐらい抜けても大丈夫だろうと川口は思ったのだが、「いいよ」

それは承諾ではなく、はつきりとした拒絶だった。なぜかそのとき、今まで感じたことのない感情を覚えた。

「近いし、歩いて帰れる。それより、副会長として生徒会のことやつておいて」

「え・・・あ、うん・・・」

有奈は保健室を出て行く。誰もいない部屋に川口1人だけが残された。

たぶんこのときからだった。
有奈から避けられるようになったのは——・・・

第27回 不器用な生徒会

「うー・・・なんか変なんだよなー・・・」

「安心してください。ぐつちゃんが1番変だから」

「そうなのかー。俺が変なんだ・・・違う!」

もうすぐセンター試験だという頃、生徒会室になぜかあるソファに寝転んで川口は呟く。傍には勉強中の雪乃がいる。

「有奈にさ、最近俺避けられてるような気がするんだけど」

上の空で呟きながら、何かしたのか真剣に考えていた。正直思い当たることがなくてますます悩む。

「嫌われるようなことでもしたんじゃないんですか?」

「してないよ。してないからわかんないんだ」

視界の片隅で雪乃が顔を上げるのがわかった。

「なんか意外です。ひなたちゃんのことと悩むんじゃないで、有奈ちゃんのことと悩んでるぐつちゃんが」

「なんか・・・気になるんだよねー・・・」

「それって恋だったりして」

その言葉に川口はゆっくりと起き上がった。別に雪乃の言葉に驚いたわけではない。

「ないよ」

自分でも驚くほど、とてもはつきりとした口調だった。

「ひなた以上に誰かのこと想えない」

「ふぉー・・・言いますね」

雪乃は少し照れくさそうに目をぱちくりとさせていた。

初めて会ったときから、たぶんひなたに恋をしていたんだと思う。

何度も告白して、ふられてもあきらめなかった。そんなにしつこかったのには理由がある。

「俺、昔有奈が好きだったんだよ」

「………知らなかったです」

「——うん。俺も気がつくのにかなり時間かった。そのときにはもう俺たちは子供じゃなかったし、今さらっていうのもあった。この関係を崩したくなかったしね………」

川口は静かに笑った。

「だから、今度誰かを好きになったら、絶対今さらにならないようにしようと思ったんだ」

「だからあんなに猛烈なアタックをしたんですね」

「あつたりー！」

そのとき、川口はあることに気がついた。

「そうだ。雪乃こそどうなの？ 安藤と」

「……向こうには私がぐっちゃんを好きだと思われてるんです。そんなのありえないのに。だいたい向こうは有奈ちゃんのことが好きなんですよ？ どう考えたって私に勝ち目ないじゃないですか……」

「わかんないじゃん。そんなの」

雪乃はぶんぶんと首を振った。

「今は安藤と同じ大学に行けることだけを考えて勉強頑張ろうと思ってます」

「俺も。みんなと同じ大学に行きたい」

このとき、2人は気づいていなかった。

まさか生徒会室のすぐ外で、この会話を聞いている人がいることになんて——

「俺がいつ有奈を好きだって言っただよ」

心底あきれたように安藤は呟く。そして、同じように生徒会室の目の前に佇たまたすんでいる有奈を振り返った。

「だってよ。どうする？」

有奈はただ俯いて赤くなっているだけだった。彼女も気づいていなかったのだろう。まさか川口が自分を好きだったなんて。

器用じゃないな・・・生徒会のメンバーって・・・自分も含めて。

安藤は苦笑しながら、部屋の扉を開けた。

「ぐっちゃん！」

そう言って入ってきた安藤はまっすぐに川口を見た。

「外で有奈が腰打って動けないでいるからなんとかしてやれよ」

「えっ・・・マジで？わかった」

川口が慌てて外へ飛び出すのを見て、雪乃は目をぱくりとさせた。

何かおかしい。有奈が腰を打つことからおかしいような気がする。

「大丈夫なんですか？有奈ちゃん」

「大丈夫だよ。あれ嘘だから」

あっさりと言い放つ安藤。ますます雪乃は混乱してしまった。

「嘘って・・・なんで・・・」

「雪乃」

名前を呼ばれた雪乃は意味もなくどきっとしてしまった。

安藤はまっすぐに雪乃を見つめ、そして言った。

「俺は高校を卒業しても雪乃に会いたい」

「――」

「意味・・・わかるよな？」

生徒会室から少し離れた廊下にいた有奈は、川口が思っていたよりも重症ではなさそうだった。

「有奈！」

近づく、有奈は顔をそむけるようにしてしまう。本当に避けられている理由がわからない。

「大丈夫？腰」

「はあ？腰？」

「安藤に聞いたよ。保健室行く？」

有奈は一瞬顔をしかめた後、小さく首を振る。その代わり、思いつめたような表情でこっちを見てきた。

「諒、ありがとう」

顔と言葉が合っていないような気もしたが、特に川口は気にしなかった。

「いいよ。痛いんなら送ってくよ」

有奈の言葉の真意に川口が気づくことは最後までなかった。彼としては、避けられていた不安感が取り除かれたことでもう満足していた。

このとき、今まで「ごちゃごちゃ」と絡まっていた糸が、ようやくまっすぐに became になった。

最終回 お調子者

その日の朝はとにかくテンションが低くて、普段からローテンションなひなたはその日だけはさらに地底を這っているようだった。

「緊張するなあ」

「ぐっちゃんだけが緊張してるんじゃないですよ」

雪乃のつつこみに川口はわかつていると頷く。

今日は大学の合格発表の日。すでに合格を決めている安藤以外は、今日で進路が決まってしまう。

涼しい顔をしているのは有奈だ。しかし、表情こそいつもどおりだが、さっきから一言も話そうとはしない。

「よしっ・・・行こう」

川口を先頭に、ひなた、雪乃、有奈の4人は掲示板のほうへと歩き出した。

ひなたは何度も自分の受験番号を確認してから、掲示板を見た。大丈夫。あんなに勉強したんだから・・・もし落ちたとしても悔いはない。

そう自分に言い聞かせて、ゆっくりと掲示板を見る。

近くには合格を喜ぶ声が多く聞こえてくる。自分もその中の1人になりたかった。

視界の片隅で、川口が息を呑むのがわかった。その横顔が輝いている。合格したんだ。よかった。

そのとき、見知った番号を見つけて思わず目を見開いてしまった。この番号・・・あった！合格だ！

何度も何度も受験番号を確認し、それでも間違いはなかった。
合格……！

「そんなに 固くならなくても大丈夫だよ」

「そう言われても……」

やっぱり緊張してしまうのだ。

ひなたは今川口の家に来ていた。高校を卒業したら遊びにおいてよと言われたことが実行されたのだ。

川口は川口で涼しい顔でどんどん家の奥へと入っていく。

「あれ……いないや。あつ、今日遅くなるって言ってなあ」

ぶつぶつと呟きながら川口は戻ってきた。

「ご家族はいないの？」

「うん。誰もいないみたいだから安心していいよ」

ほっとしたような、逆に緊張するような複雑な気持ちになった。

「ちょっと待っててね」

部屋にひなたをあんないすると、すぐに川口はリビングに行ってしまう。所在無げに辺りを見渡し、すんとひなたは座り込んだ。ここが川口の部屋だ……

机の周りはとても散らかっているが、それ以外は片付いている。おそらくこれが本来の姿なんだろう。それに、川口の匂いがする。

しばらくして川口はお菓子を持って戻ってきた。

「ごめんごめん。これでも片付いてるほうなんだよ」
ビフォーをぜひ見てみたい。

志望大学に受かったのは、ひなた、川口、雪乃の3人だ。安藤は推薦ですでに合格していたが、問題は有奈が落ちたということだ。それを知ったとき、川口はじぶんのこのように落ちこんだが、当の本人はけろりとした態度で、

「私、本当は他に行きたいところがあったの」
それは嘘偽りではなく、実際に彼女は後期試験でさらに難関大学に合格している。恐るべき人だ。

「だったらなんで慶明受けたんだろー」
川口は最後までわからなかったようだが、ひなたは安藤からその話を聞いてわかっていた。あえてそれを川口に言うつもりもなかった。

鈍感というわけではない。ただお互いに近すぎて、逆に見えないものもあつたのではないのかと思う。

ぼりぼりと出されたお菓子を食べていると、川口が何かを話していることに気づいた。

「え？」

「いや、今日何時まで大丈夫かなって思って」

なぜか川口の様子がおかしい。ひなたは不思議に思いながらも質問に答える。

「あんまり遅くは無理かな……ごめんね」
「オッケー。わかった」

なぜそこでつつと笑うのかわからない。いや、わからないフリを

していた。実際ひなたは部屋に入ってからずっと意識してばかりいたのだ。

ダメっていうか・・・まだ無理だ・・・

頭半分でそう考えながら、もう半分では別のことを考えていた。結局結論は出ないまま、時間だけが過ぎていく。

雨が降り出したことに気づいたのは午後6時を過ぎた頃だった。

「やっぱ・・・傘持っていないのに」

「ほんとだー・・・これじゃあバイクで送ってけないじゃん」

いつから振り出したのだろうか。雨は結構強く振る。

「傘はウチの使えばいいよ」

川口の提案にひなたは頷き、ちらつと時計を見た。

「ごめん。今日は帰るね」

「えっ！もう？」

そのときの川口の顔は、まるで子供のようだった。ひなたはこの表情には弱い。

「——ごめん」

「ううん。仕方ないもんね」

川口はいつものように立ち上がって、ひなたを玄関へと誘導する。前の彼氏の家に行ったときは違う。そのときは、相手の気持ちなんて考えたことがなかった。今さらだが、別れた原因は自分にあったような気がする。

玄関まで下りてきて、川口に誰かの傘を貸してもらった。
「りよう・・・？」

「あつ！いや、それ、小学生のときに使ってた傘で！名前が……うわー」

顔を赤くして照れる川口は本当に子供だ。だけど、そういうところに惹かれたのだ。

「諒」

「もー……からかうなよー」

「違う……違うよ」

ひなたはふるふると首を振る。川口が顔を上げた。

「もうちょつとだけ……ここにいてもいい？——諒」

初めて呼んだ彼の名前。川口が驚いた顔を見せた。

午後8時過ぎ、ひなたたちが外に出るとすでに雨がやんでいた。『りょう』と書かれた傘を使ってみたい気もしたが、あきらめて帰ることにする。

ガレージでは川口が原付を出してくる。

目が合うと、彼は少し照れた表情をした。

「忘れ物ない？」

「うん。大丈夫だと思う」

「……はいてるよね？」

「は？」

「……パンツ」

「はいてるわ！」

ひなたがつつこむと、川口は安心したように笑う。それがひなたを心配してのことだとわかった。

川口は子供ではなかった。いつも相手を気遣ってくれる。お調子者だけど、こんな彼が大好きだった。

カップルを乗せたバイクは雨上がりの夜の道をまっすぐに進んでいった。

最終回 お調子者（後書き）

最終回です。ここまで読んでくださってありがとうございます。

途中いろいろありましたが、無事に終わることができました。

コメントをくださった方ありがとうございます。

すごく嬉しかったです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0939g/>

不機嫌な彼女とお調子者の彼の話

2010年10月9日18時34分発行